

多
香
鳥

目次

文書 5- 後半	
文書 5- 後半	3
文書 6	
文書 6	51
奥書	86

文書 5 - 後半

文書 5 - 後半

8月20日。

夢を見ました。(あなたは思っているのだろうか？ あなたは(——これはあなたにとってのあなた、即ちあなたの僕のことですよ？)いつでも夢を見ているのだと？

狂った？

でも、わたしがそうと見止めはしないだろう。譬え暴力的な棍棒で口から肛門まで太陽を突き刺されたとしても...

なぜ？

それはあなたの無能を証明して仕舞うから。僕はあなたの爲に祈るような気持ちで) 夢を見たのでした。

ささやかな夢。

指先に蝶が止まる夢。

それだけ。

鱗粉をちらすことさえない。

ゆっくりと、羽根はふるわされるだけだから。

それだけ。

歎きや、悲しみや、怒り、ないし悔恨？ もしくは不意にわき出でた喜びのような物... た
たとえばある日にこうした、今日のようななんでもない一日のなかにこそ本当に心に染み
わたる幸せってあるんだなど、まるで目の前の風景ときには事象のことごくさえ追憶す
るように体験してしまう、...そんな。

わかりますか？

それら、さまざまな感情が感情として形をなすまま(それらは形などなさないのです。形
は、追憶して見いだす偽りの、... 正確には利口な蜥蜴と瀟洒なみのむしのごとき擬態の
見え方に過ぎないのでしょうか)ひとつに固まって、僕は蝶をみていた。

わかりますか？

あなたにはわからない。

それ、よくわかる。けれども、どうしてだれかに傳えたかったのです。

ともあれ、あなたは曇り空の下にいた。

一日中。

私と同じように(今日は時々霞みにまがう霧雨が木の葉を濡らした。

ココナッツの。棕櫚の。そしてブーゲンビリアの。時に。

ほんとうに、ほんの時々だけに。濡らされた花々。

さまざまな)。蘭をつれて来たとき、今朝、タオは夜のことにについては何も言わなかった（彼女は迷ってなどいない。すでに決めているわけでもない。

なにも知らない儘に、彼女は臆てなにが起きるのか知っているのだ。

いわば中身のない空っぽの記憶として、彼女は臆ての夜をすでに知っていた）。

私もなにも聞かなかった。

彼女は可愛らしく見えた（いつもそうだった）。

蘭は、昨日の事など意に介さなかった（記憶していないのではない。おそらく鮮明に覚えているのです。ここで、すこしわたしたちは考えなければなりません。過去の事象をもとに臆ての起きるべきことに怯えると呼ぶのは、それこそすさまじい暴力性があるのではないか？

蘭には過去と臆てとを関連付ける暴力性を欠いているのです。

彼女にとって、昨日の暴力はまざまざと焼き付いている。それそのものの固有のじょうとして。

故に、それは一切の不安も怯えも臆てにも今にも持て来たらせないのでした...

彼女を狂気の人と呼べるだろうか？ むしろわれわれのほうこそ狂っているのだ。

そう思いませんか？）。

今日は彼女に構っている暇はなかった。

わたしにとって、今日の彼女は今日の私の赤の他人に過ぎなかった。表情のない顔をして、そしてわたしの傍らに（影をふみそうなほどにそばに）いただけだったといっている。

今日の報告では私は、わたしが彼女たちにだけかわっていた譯でもない事を証明できるので（彼女たちの事など些末なことにすぎない。私にとっても、地球にとっても、阿輸迦王にとっても、阿輸迦の花そのものにとっても）すこし、心が和らぐを感じる。

グイン・ヴァン・トゥイエット・ハンという長い名前の（尤も、四音。ノ、ブ、ナ、ガ。ヒ、デ、ヨ、シ等に同じ。ト、ク、ガ、ワ、イ、エ、ヤ、ス等に至ってはきっちり二倍の音数なので、その気ちがい沙汰の膨大さは押して量るべし...まして麻佐迦阿迦都迦智波夜比阿米能於志保美美能美古登にいったては）男に同行してすぐちかくの（といって、バイクで30分程度...）ある神秘的な（且つ単に詐欺にすぎない（せめて彼女に白鷺の華麗さえあれば...））人物の所に行った。

霊媒師（こっちでなんと呼ぶのかは知らない。漢語圏だから、案外その儘かも知れないね？——日本文化とは巨大なかの支那諸帝国の落とした畸形にすぎない...言語そのものからして已に）。

トゥイエット・ハン（女性的な名前の男、...長身。黒い肌。知的で、若干不遜な眼つき...善良な男です）が私に言ったのだった。いつかの Line での雑談で（...彼は私になついているので。

まるで馬鹿な子犬のように）。

——ね、面白い人にあわない？

彼は日本で4年ばかり働いていた。帰ってきてから建築会社をやってる。ダナンで。

顧客は日本人。日本企業。最近、ベトナムの富裕層にも（最初は日本人としか仕事しないよ、と言っていた。それは帰ってきて間もない頃の、彼の、彼以外には意味不明の矜

持だった、ということなのか。

わたしは彼は母国人と働くべきだと思いますよ。彼は彼の母国にいるんだから）顧客を広げている。

霊媒師詣でなど単なる冗談のようなもの。

タオが会社へ行って一時間もしない間にトゥイエット・ハンが迎えに来た（その間、僕は蘭が部屋の中にいることさえ忘れていた）。ドアを開けたトゥイエット・ハン曰く、（おどろいたように、そして次の瞬間私を見て微笑み）「あれ？

香香美さんの、こども？」

私は笑う。

笑う私をトゥイエット・ハンは見ている。

幸せそうな笑みを、彼はしていたのだった（陽気な男だった。かつ、嘆かわしい時にはだれよりも歎いた...）。

「預かったの」

私は云った。蘭はトゥイエット・ハンの興味をそれ以上ひく事はなかった（彼が無視していたなど、そんな事実はない。蘭の身の上を知って彼はむしろ彼女に目に染みるような誠意をみせて蘭をいたわるのだった）。トゥイエット・ハンがわたしたちを先導した。蘭をバイクの後ろにのせて。

わたしは彼に従った。

その家はダナンの工業地帯の近くにあって（広大な車道、行きかうダンプ、トラック、高速のバイク、何萬ヘクタールかという平地にいくつもの会社がさまざまな生産工場を造る、および輸送拠点も...）その傍ら、突然現れる木立ちに埋もれそうな市場の、さらに先。

開発の途中なのか中断後なのか。更地の広大のところどころに出没する住宅数軒のつらなりの中に霊媒師の家があった。

普通のベトナム人住宅。古くはない。築十年からこっち。廣くもない。

狭い庭で5歳程度の子供と7歳程度の子供が遊んでいた（兄弟には見えない。餘に似ていないから）。開けっ放しのドアを覗いて（ここでは在宅時にはかならずドアなど開けっ放しにしていくものだ...）トゥイエット・ハンが霊媒師の名を呼んだ。

突き当たり当たりの階段から女がひとり顔をのぞかせ、そして上がって来いと云った（これ等はベトナム語の会話である。仍て、単に事のながれとその場の雰囲気からわたしが類推したに過ぎない。だから仮に霊媒師は先に天国に行ったとその女が云い、トゥイエット・ハンが庭に豚が死んでるぞと云ったのだという可能性もあるだろう。もしそうだったとしても、わたしは上がって来いと女が言ったのだと理解し続けただろう）。顔は見えなかった。瘠せた影だった記憶があった。不確かな記憶に過ぎない。

聲から、すくなくとも上がって来いと云った彼女が40歳程度の女であること知れた。

一階には子供意外誰も居なかった。そもそもそれが霊媒師の、ないし霊媒師一家の誰かの子供である必然もなかった（事実、後に顔を合わせた霊媒師とはまったく似て居なかった。

とは言え、ここられでは子供は好き勝手にどこでもあそぶのだ。

ことわりなしに、人の家の庭であっても）。

上に上がると佛間らしい空間に窓を背にして彼女はいた。

故、最初彼女は逆光の中の影にすぎなかった。

黒い線が光を遮断したように見える。

それは一瞬だけ。

ほんの一瞬。

私の眼はすぐに彼女の肥満体が笑っているのを見た。

その笑みに（例えば木彫りの仏像よろしくの）神秘性などない。

そもそも彼女は自分に神秘性など求めていなかった。

彼女はただ、サービス業の一般として笑ってやっていたにすぎない。

——こちらは、ニーさん。

トゥイエット・ハンが云った。

その日本語は霊媒師ニーの興味を若干そそったらしかった。

それ、一瞬耳に触れた異國語の何語かもわからない霊媒師ニーはわたしを見、トゥイエット・ハンを見、そして私を見、すぐさま殊更にやわらかく笑んで見せ（まるで子供にするように、だ）そしてトゥイエット・ハンに云った。

——こちらは何國人だい？ 中国人かい？（おそらく。中国という言葉だけ、わたしには聞き取れたのだ）

——いや、日本人だよ（Không, anh ngi nht）。

——そう...じゃ、すわってください。ほら、そこに（おそらくは）

トゥイエット・ハンはわたしに霊媒師ニーの前に座るようにいい、自分は傍ら、わたしに憑き添うように座った。

もっとも、飽く迄トゥイエット・ハンが中心になって質問したのである（来年、3月に彼は結婚する予定だから、その相談をしていたのだろう）。

霊媒師ニーの降霊憑依はなんら儀式をとまなわなかった。

トゥイエット・ハンから相談を聞く。そして最初カードで簡単にトって（十分くらい）それからおもむろに目を閉じると手をあわせて立ち上がり、彼女の正面の（つまりは私たちの背後の）祭壇の観音像に膝間付き、ひれ伏す。立ち上がり又手を合わせる。それを四度くりかえして、最後立ったまま四度合わせた手を上下させる。

その間念佛を聞き取れない小声で口の中にのみつぶやく。

そして

眼を開けない儘に胡坐をかき、はたと目を開けたらそこにトゥイエット・ハンの先祖が降りてきている、と。

それだけ。

先祖はかなり不遜だった。トゥイエット・ハンをときに頭ごなしに叱る。トゥイエット・ハンがなにか説明しかかっても、そんなものは言い訳だということなのか、一切聞く耳をもたない。

会話の詳細についてトゥイエット・ハンはなにも教えてくれなかった。

遠い先祖ということなんか。時代がかっている。身振り手振りが、である。

トゥイエット・ハンには心霊の出現を恐怖したり畏怖したりというそぶりはない。

あまりにも普通に、霊の憑いた叔母さんがいて、それに怒鳴りちらされているのだ。

都合二十分ぐらいか。

始終高圧的というでもなく、時にすっとやさしくなったり、とうとつに聲をひそめておそらく噂話に興じたり、いきなり慰めはじめたりはげましたりと、それはそれで飽きさせない。

終わりは呆気ない。

話が途切れた頃合いに、霊媒ニーが頭を揺らし始めて、そして二三回うるくるくびをまわし、そしていきなり我にかえるのだった。

——どうだった？ あなた、納得した？（おそらく）

霊媒ニーは云った。

トゥイエット・ハンが彼女に真面目な顔で何か云っていたが、それはなにを云っているのか判らなかった。

思うに、霊媒ニーは憑依時の記憶が完全にあるのだった。

もっとも、なにも記憶があってはいけないとはいはない。

いずれにせよ、それに関する物理学法則についてアインシュタインはなんの公式も残してくれなかった。

故に霊媒ニーは先の先祖霊との対話を含めてトゥイエット・ハンの相談に親身に乘ってやっているのである。

わたしはそう解釈している。

料金は50万ドン。これが高いか安いかはそれぞれの心のままにとでもいうしかない。

わたしはなにもこのような詐欺を、（あなたのように）悉く罵倒する気にはなれない。

それが成立してしまう所に、人間種の生態のかたちがあるのだろう。

間違っても猫乃至犬の社会に霊媒師という職種が成立するとは思えない。

料金の支払いまで終わった比に、トゥイエット・ハンがわたしに云った。

——香香美さんは、なにか相談したいことある？

トゥイエット・ハンの眼が落ち着いていた。霊媒師ニーは詐欺師として彼に幸福を与え、かつ、窃盗したのだ...

——いつ世界が亡びるのかとでも聞いてくれ。...と、微笑みかけたわたしがそう云おうとしたとき、わたしは耳に声を聴いた。

——お前は...

と。

振り返ればそこに、...同じところに、同じように、霊媒師ニーがいて、私を見て表情も無く微笑んでいた（この下手な言表。つまり霊媒ニーの眼がわたしをみていなのである。故に表情がいっさい匂わず、頬の形だけがきれいに人なつっこくわらっているのだ）。

一瞬遅れて、霊媒ニーが日本語をはなしていることに気付いた（もっとも、...なぜだろう？

此の時、違和感はなにもなかった。まるでごくごく当然のように）。

——お前は...

と霊媒ニーは私を見つめながら（見ていないのだ。なにも。ただ、何も見ていない黒目がわたしをむいているのである）

「風船を割った子だね？

三つ割った子。

風船を割った子だね。

笑ったね。

割って、笑ったね。

——それ、何の話？（わたしは霊媒ニーに云った。）

——ね、おばけが来たね。（と、トゥイエット・ハンが云った。おばけの語に悪意はない。彼は霊という語も心霊という言葉もまして先祖霊だのなんだのの語も知らなかったの、知っている語彙から素直に発話したのだ... 事実、彼の眼には尊敬が浮かんた。... 霊媒への？ 降りて来た異国の霊への？）（霊媒ニーの口がはっする聲は普通の、ニーの地声に過ぎない）

「あの子だね。

すいかをにぎりつぶしたね。

すいかを、あの子だね。

すいかを、にぎってね。

あの子、口が汚れたね。

私は聲を立てて笑った。

——あなた、だれ。

「あなたを赦してる。

知ってる？ もう許してる... しかたないから。

違う？

だれが一番傷ついた？

わたしじゃないよ。

お母さんじゃないないよ。

あなたでしょ？

知ってる。

——母親？... あなたが（このとき、私はむしろ笑んでいた。そう記憶する。それが、例えばトゥイエット・ハンの目にどう見えたかは知らない。）

——母さんなの？（と、トゥイエット・ハンは明るい聲にささやく）

「多伽子。

おまえはいまでも覚えてるね。

多果子。

お前はいつでも忘れてないね。

多香子。

それで時々忘れたね。

今はね。

今はね。

お前はわたしを知ってたね？

——何が云いたい？（霊媒ニーは変わりなく、口でだけ微笑むのだった。

このあたりで、わたしはひとり芳香を嗅いでいた記憶がある。

なんの芳香？

蜜まみれの百合の花というのか。百合の、あの食欲をなくさせる強烈な擦り付けるような匂いに、同じ強烈さでみつをまぶしたような…)

「憶宇波

お前はね

祁布和迦禮

お前はね

憶宇阿

見て居たね

祁布和迦禮

そのね

憶禮波

そのね

祁布和迦禮弓那

ゆきふるからね

憶禮

雪もふればね

阿須波

みていたね

憶禮那

お前はね

阿須波那

忘れたん？

阿須波阿布美登

お前はね

阿須波阿布美騰那

見て居たね

憶禮阿

そばで

於母蔽騰母那

そばでね

於毛蔽騰母那

おまえはね

憶禮阿

降る雪は

與夜

それでもね

憶宇波

おともなく

與夜那

おとづれもなく

憶宇波
しずかにね
與夜布祁奴羅牟夜
お前はね
憶宇
降る雪に
與夜羅布祁努羅牟夜那
あたたかな
曾弓能奈
降る雪にはね
夜乎波
ゆらゆらと
曾弓能那
かがやくね
與乎波
ゆらゆらと
曾弓能都由祁彌
ふるゆきは
曾弓能都由祁彌
おまえはね
夜乎
俺の見た風景を語ろうか？
俺の見た風景を語ろうか？
おまえとふたたびあったからね。
俺の見た風景を語ろうか？
その日わたしは手首をきった。
おまえの見て居る前でね。
俺はお前を殺さなかった。
あんなたは自分で死んでいった。
ひとりで。...なぜ？
夜乎
ひとりにするともりはなかった。
たとえ、お前を、
たとえ、お前をね
夜乎波
あんたは俺を愛さなかった。
目に入れる事さえ無かった無かったろう？
一人にする気はなかったよ。
それでもひとりにしたけどね
十二歳のお前をね？

俺は誰の子？
俺は誰の子？
夜乎波
俺はあんたを憎めさえしなかった。
愛さなかった。
俺はあんたを憎めさえしなかった。
夜阿
手首を切ったのはわたしの傲慢
お前を捨てた。
幼いね？
お前を捨てた。
波阿波
那伊伎曾禰
由岐賀布留加良
那伊伎曾禰
彼が私をなぐったときに、わたしは窓の向こうに雪を見た
最後に見る雪だと思った
ひとりで見ながら死んでいく
わたしはひとりの女を見た
それはねお前の多伽子だろう？
それはねお前の母親だろう？
わたしはお前の事など忘れた
心はわたしに一致した
ぴったりぴったりひとつになって
ぴったりぴったり由羅らいだ
ゆらら由良らにゆららいだ
その雪に
ゆららゆら羅とゆららいだ
夜阿波
那伊伎曾禰
夜阿波
由岐賀布留加良
夜阿波
那伊伎曾禰
夜阿
お前はひとりでみていたね
祁布和迦禮
それ港区の六本木
憶宇阿
舊防衛庁には櫻咲く

祁布和迦禮
まだあるもんか櫻など
憶禮波
冬ゆきふれば雪の花
祁布和迦禮旦那
花のいろこそ同じけど
憶禮
匂いはまったく別だろう？
阿須波
匂いはまったく別だろう？
憶禮那
お前はね
阿須波那
わたしをじっとみていたね
阿須波阿布美登
お前の前で肌を見せ
阿須波阿布美騰那
つやつやつやと肌を見せ
憶禮阿
雪の色した肌を見せ
於母蔽騰母那
教会近くのその部屋で
於毛蔽騰母那
東京タワーは雪の中
憶禮阿
窓の向こうに雪の中
與夜
お風呂に使ってつやつやと
憶宇波
溶けない雪はつやつやと
與夜那
お前はみたねこの俺が
憶宇波
お前は見たねこの俺が
與夜布祁奴羅牟夜
お前の前で死んでいく
憶宇
つかったお湯は紅の
與夜羅布祁努羅牟夜那
椿の色した花泉

曾弓能奈
降る雪をはね
夜乎波
ゆらゆらと
曾弓能那
降る雪をはね
與乎波
垣間見る
曾弓能都由祁彌
心の中で垣間見る
曾弓能都由祁彌
俺、思ったんだよ。なにしてるの？
俺、思ったんだよ、...ね？ ひとりで何をしてるの？
夜乎
手首を切っても
目の前で
手首を切っても
目の前で
お前はただわたしを見たね
真珠の肌の多伽子を見たね？
雪染む肌の多迦子を見たね？
手首を伝う血の雫は
憶禮
その細い長いしたたりは
憶禮波
紅に
憶宇
紅の蛇？
お風呂につかれば椿風呂
泉の中は椿の香り
あんたは死ぬのを赦したね
わたしが死ぬのを赦したね
夜乎
あんたを腹にねじこんだ
夜乎
あんたを多香子にねじこんだ
夜乎
黒い肌した天竺あたり
夜乎波
黒い肌した天竺あたり

夜乎波
あいつらが。奴らねじ込みぶち込んだ
夜乎波
あいつらが。
夜乎波
奴らねじ込みぶち込んだ
夜乎波
多果子の腹で何思う？
夜乎
多伽子の腹で何思う？
あの日も雪は降ったかね？
ひとり留守番ひとり居る
こどもの家にねじ込んで
多伽子の家にねじ込んで
こどもの部屋にねじ込んで
多果子の腹にねじ込んで
天竺当たりのながれもの
多迦子の胎のそのそこで
あんたはなにを思ったね
雪はその日もふったよね？
夜乎
多伽子の肌には降ったよね？
夜乎波
死んでく多迦子を見て居たね
夜乎波
俺はひとりで見て居たね。
夜乎波
死んでくあんたをひとり見た
夜乎
かえりみすれば雪の色
夜乎波
白い地表に明け方の
夜乎波
青くくらいそれは空
與乎夜
朱にひかるのは東京タワー
夜乎波
雪の夜はね、もうすぐに
夜乎波
雪の夜はね、もうすぐに

夜乎波
もすぐ盡きる
もうすぐ果てる
もうすぐ果てる
夜乎波
おうや
那都能與波
夜乎波
おうや
那都能與波
夜乎羅
うらや
麻多余比那賀良
夜阿
はいや
麻多余比那賀良
夜乎波
やいは
那都能與波
夜乎
おうあ
阿祁奴留乎
夜阿波
うや
阿祁奴留乎
夜乎波
うやは
久母能夜
乎乎波
うあは
久母能伊豆古邇
憶禮夜
やを
久母能伊豆古邇夜
憶禮波
やをやをは
都伎夜騰留良牟夜
憶波
うあは
都伎夜騰留良牟夜

憶波

はあ

トゥイエット・ハンはささやいた（その、耳に聞こえた彼の聲に返りみたそこでトゥイエット・ハンはひとりで微笑んでいた。...わたしに気を使って、せめても微笑んでいたのだ。

零れ落ちるような。

したたりおちるような。

あくまでも新鮮な微笑）耳に。

私の。

——これ、誰？

わたしは応えようと（なんとこたえようとしているのかもわからない儘に）唇を開きかけた時に。

ささやく。

トゥイエット・ハンが、再び

——知ってる人？

つぶやいたので、私は

——なんて言ってるの？、と。トゥイエット・ハンはそういった。

——俺の母親なのかな？

私は応えた。

——お母さん？ 亡くなってるの？

——子供のころ

——なんで？

——それ、秘密（...と。

私は秘密にした。あのこと。十二歳の時に、私が彼女の頸を絞めた事。そして腹を刺したこと。そして飽きもせずに胸も、四肢も...それは優しさだった。

だれにも理解されなかった。

あなただけは理解を示そうとした（やわらかく、目を背け、頸を冴え背けながら）。

母がもう二度生き返ることのできないように。

永遠に眠りの淵にいられるように。

わたしは何度も母を惨殺しなければならなかった。

あの部屋。母が男から与えられていた六本木の交差天近く。

元舊防衛庁跡地の近くの極度につ閑静な一角。

まるで、此処が六本木などではないかのような...嘘をつかれたような静かな、...窓から見えた。

あの雪の日も。

窓から、オレンジ色の東京タワーが見えた。

いつでも見えた)。

ふいに我に返ったように（そして同じ地声の儘で）霊媒師ニーは云った（だからわたしは靈がさって彼女自身が彼女自身の日本語で話しているように思っていた）。

「なんどもあなたの前で、行ったけど。...何度もね、聞こえた？ 聞こえないよね？ お

母さんもう死んでるからね...あなた、関われないからね（でも、いつもそばにいて、応援してる）。あれ、わたしが悪い。傷つけちゃったね。阿波さんが、...元方さんがあんなふうに、わたしなんかいらないと、ね？ でていけ、と。もういないから、と。けれども、元方さんの庇護、...保護？ だったでしょう？ わたしたち、でも、思い切れないじゃない？...だめよね。そういうとき、思い切らないとだめなのね。だから、私が悪い。でも、あの時はもう生きられなかったからね。だからあなたも捨てたね。

私ね（憶宇）あなたもね、捨てて（憶宇波）

そういうこと、自分も捨てる（憶宇）命捨てる（憶宇）あなたも捨てる（憶宇）みんな捨てちゃう（憶宇波）

手首切った時、其の時には（夜乎）なんだろう？（夜乎）あったかくなったのね（夜乎波）うではつめたいけど（夜阿）

びっくりした顔したね（憶宇）お母さんが（憶宇）福脱いで、と、霊媒師ニーは嘲るように笑った。聲を立てて（自嘲の？）

「でも（波阿）逃げなかったね（憶宇）えらいね（波阿）ちゃんと最後まで見てたね（憶宇波）お風呂のお湯の中で、お母さんひとりでしんでくの

——お母さん、亡くなったの？

トゥイエット・ハンが耳打ちした。

わたしはうなづいた（さっきも同じ事を繰り返した実感があった）。

「なにを？

霊媒ニーは云った。

「なにをいいたい？

——あなた、だれなの？

わたしは思わず、そう云った。

霊媒ニーの眼はわたしを見ていた（その何も見ていない眼で）

「なにを、

言いかけた時に、霊媒ニーの唇が私の理解できない異世界の言語を話し始めた。

いたって普通に。

彼女の黒目は私を已に見て居なかった。

彼女はトゥイエット・ハンに話しかけていた。

その時に、それが彼女のベトナム語だったことに気付いた。

トゥイエット・ハン曰く、外人の靈に体を貸したのは初めてだったと喜んでいる、といった。私は思っていた。わたしはただ微笑む以外に術を持たなかった。

トゥイエット・ハンと霊媒師ニーの雑談は続いた（なにも深刻なものではない。

おそらく。是は単に彼等の雰囲気から推し量ったにすぎない。たぶん、霊媒の仕事についての話？ 乃至、これまでの体験談？ 或は、彼女の家族についての茶飲み話とか、そんなもの...）。わたしはその席を辞した。下に降りた。蘭がいないことに気付いたのだった（最初から二階にまで上がってきていなかったに違いなかった）。蘭を見に行くことをトゥイエット・ハンにだけ告げた。

霊媒士は心配そうな顔をした。

たぶん、異国語の理解できない会話に飽きたのだろうと、おそらくは私の手持ち無沙汰

を案じたのだった。

大丈夫、と。トゥイエット・ハンは霊媒師ニーに云った。

下に降り、見まわしても蘭はいなかった。

或は、どこかに出て云ったかもしれない。

自分では帰って来れないかもしれない。

どこかで死んでしまうかもしれない。

それこそ、幹線道路の大型車両にでも轢かれて？

ふと思う。タオはとがめるだろうか？

確信として想う、彼女は赦すだろう——だいじょうぶ、だよ。ごめんね、たいへんだった、ね。

と。

鼻水を咬むような聲で甘え。

タオの髪の毛の匂いを思い出した。庭に出ると日差しが直射した。正午ちかくだった。子供たちはすでにいなかった。

気付いた。

わたしは已に視界に蘭をみていたのだった。

正面の門の兩腋の二本づつのブーゲンビリア、その右りの方の木陰に蘭はこちらを向いて立って、そして眼を閉じていた。

頭の上でブーゲンビリアの赤紫と白がないまぜになって咲いていた。

木陰に蘭はひとりで翳った。

8月21日。

昨日は途中で報告をやめた。

なぜだろう？

すでに終えて仕舞った気がしてしまったのです。

だから、つづきを報告して、それから今日の報告に取り掛かりましょうか。

昨日は、あれからトゥイエット・ハンと蘭と一緒に食事をして、そして部屋に帰った。

それからアトリエに行って（蘭をつれて、...ね？ さすが一日に二度も放置するのは可哀想でしょう？）カンバスに下塗りを。

いつものように、とりあえずはブラウン系の絵具を薄く説いて。

非常に、非常に薄く。

おつゆ状態だからすぐ終わる。あとは乾くのを待つ。

これに関しては、むかし東京で下地膜の強度に関して疑問視された事がある。

私の答え。知った事か。

剥がれるなら剥がれて仕舞えばいい。

それはそれで燃え尽きるより美しいかもしれない。

静かに、剥がれ落ち続ける、滅びの絵画の滅びの姿。

此の日は久しぶりに日が差した。

午前の深い時間... ちょうどトゥイエット・ハンと霊媒師ニーが降霊術終わりの雑談に興じている頃... から。雲を割って降り注ぎだした日の光、切れ目の青の久しぶりの色の下に、僕たちはホテルまで帰ったのでした。

蘭は相変わらず沈黙し、そして私は相変わらず時に蘭が傍らに存在してゐることさえ忘れる。

何をするというでもない。

薄いブランの、あらい刷毛の線の残る画面をみていたのだ。

乾き切るのに何日かかるのだろうかと思った。こっちに来てから、実は作品などひとつも書かなかったから、その感覚がなかったのだ。

日本なら夏は一日で乾く。もののみごとに。

冬は、...どうだろう？

カンバスに聞かなければわからない。

こっちの気候は常夏といえば常夏だった。

気温は曇っていても 25 度をさがりはしない。ただし此の處毎日雨。ただし今日はちょうど止んでいて、日も差している。

窓の向こうに、海に雲が無数の光の筋をなげ、所々に青を垣間見せるのだ。

取り敢えず一に放っておこうかと思う。

カンバスのすれすれすれに鼻をつけて、その腐った油のような陰湿な匂いを嗅いでいた時にノックがした。

夕方、5時半。

タオは最初寝室の方にいったのだと云った。だれもいなかったからこっちに来たと。

蘭はベランダに出ていて、そして姉の背後にいることだに気付かない。

すくなくとも、反応をは示さない。

タオはこれからの夜について、自分からは切り出さなかった。

覚えているのかどうかさえ、彼女は私には悟らせない。

あるいは、本当にいま、彼女の頭にそんなことはなにも、...わすれられるよりきれいに、まったく存在してゐないのかもしれない。

私は其の儘放置した。ややあってタオはベランダに出た。

ならんで向こうを見、なにをふたりで語り合う譯でもなくてただ後ろ姿を見せていた。

風はほとんどないようだった。

衣服にはためく気配はなく、かつ髪もそよともしない。

片方は二十七、片方は十四、その差十三。片方は白く、片方は黒い。片方は豊満で片方は瘠せていた。片方は常に媚びて甘い顔をし、もう片方は冷酷なほどに他人の顔じみて整わせている。

彼女たちは他人同士に違いないとわたしは思うともなく思った。

ほんの数分程度、蘭は姉につれられて部屋に入ってきたとき、いまさらに私の部屋の中にゐたことを知ったような、そんな顔をして、そして私を見た。

タオが私にめくばせして（それが何を意味する目配せなのかは、私には終にわからなかった）わたしの眼の前を通り過ぎた時に

——じゃ、真ん中に立って。

わたしは云った。

——真ん中？

——部屋の。

わたしはそういった。

タオは従った。

いまさらにタオはブランに塗られたカンバスに驚いた。何これ？ といい、どうしたの、これ？

と。

やがて一度真っ黒に塗りつぶされたカンバスを見たら彼女はなんというのだろうか？

——こっち向いて

笑いながら言ったわたしにタオはふりかえり、そのまま私を見詰めた。

スケッチブックを手にとり、そして開きもしない儘に壁にもたれる私を、タオはみていたのだった。

暫くして、何か言いかけたタオに、

——動かないで

わたしは謂い、そしてそのまま彼女を見つめ続けた。

夕焼けは、此処からはどうして見えない。

だから、ただ空間は暗くなる。

空に青みが終に消えた比に、わたしは云った。

——自分で脱いで。

行った聲に、明らかに飽き飽きした色があった。

——じっとしてて

何か言いかけたタオに入った。

——はやく。

私は云った。

彼女は嘲弄されたに等しかった。

くらがりに、とはいえ自然に眩んで云った以上、最初から目に熟れたむしろ親しい昏さに、タオは微笑み続けた私を見ていた。

タオは従った。ブラウスから、スカート。

それから、それへ。

とりたててためらうでもなく。

——黙ってて

なにか言いかけたタオに、私は云った。

——そのままにしてて。

タオの傍らを横切って、そして彼女の右のベッドによこたわり、わたしはタオを放置した。

窓の向こうの夜の空を背景にして、私はタオを見詰めた。

雲は、顯らかな姿をさらさない間にいつか、そのほとんどを散らして仕舞ったに違いなかった。

月の光が雲母の深い白みを空にまばらに広げた。

雲母は流れた。

薄いそれが月に懸かった時に、月はそこに金色におおきくきらめいた。

——しゃがむの。

わたしは云った。
ひさしぶりに聞いた聲だったはずだ。
ひとりのタオにとっては。
省みてなにか言いかけた時、
——しゃがむんだよ。
わたしは云った。
——はやく。
と、未だなにをすればいいのか腑に落ちない儘腰をおとしかけたタオに、
——そのまま手をついて。
なにかいいかけた一瞬に
——はやく。
わたしは云った。
——床に、両手つけて...
と。タオが尻を床に着けようとしたので
——それだめ。
早口に、ささやく。
——お尻附けないで。...穢いじゃない...穢いの好きなの？
何か言いかけたタオは
——早く。
行ったわたしに自分のひらきかけた唇をくずして、そして、振った顎に私を見ていた。
体勢的にすこしのむりがあることは知っていた。
タオが、うしろに体を投げ出すように、そっと倒した時に、床に掌は音を立てた。
——痛い？
タオはなにか言いかけ、その瞬間に
——うごかないで。
わたしはささやく
——痛くなかった？ 大丈夫？
言いかけたタオに
——じっとしてて。
ささやく。
わたしは、
——そのまま、頭、下にするの。
云った。
タオは頭の中で、私の指示を反芻して居る用だった。
すこしおくれて、そして、頭を伸ばした腕のしたに仕様とする。
しぜん、背筋はのけぞらされて、体軀は震えなっがブリッジを造る。
——もっと、のけぞるの。
行った私に、背筋の限界を超えて一瞬のけぞりかえった時に
——なんで、手、ぬくの？
私は云った。

ただ、冷たく。
あくまで、タオを小莫迦にしたように。
——ね、なんで？
タオはなにか言いかけて、首を震わせた。
——なんで手、抜くの？
タオの二の腕と内ももに震えが止まない。
——やる気ないの？
タオの黒眼だけが横に無理やり流されて、震えながら私を見ようとした。
——俺の事馬鹿にしてる？
タオが言いかけた時
——だまれよ。ちゃんとやれよ莫迦。
吐き捨てるように私は云った。
背筋を剃り返し切って震えるブリッジは、月の光に息づく腹部を、あるいは胸の上に垂れさがる不格好な地房を移した。
髪が床に垂れ、月にいや白むタイル張りの床に複雑な汚れを描く。
——なんか、全然、醜いね。
私はささやく。
——というか、...ね。
まるでひとりごとのように。
——生き物として穢い。
いつか、皮膚に
——ね
汗がにじんでいるのに気づいてた
——汗かいた？
その白い、翳る肌に
——シャワーとか、ちゃんと浴びてる？
わたしはあざ笑う表情を
——くさい。
わたしを振り返れないタオの
——なんか匂うよね。
腕の向こうの横顔の爲にうかべて
——トイレ行って、ちゃんと綺麗にしてる？
その首は痙攣し始めるのだった。
——もとからくさいの？
うりやりの、体制のせいで？
——やばいね。
大股を開いたももが
——穢すぎて。
のたうつように震え
——じっとてろよ。

何をするでもないタオに
——いわれたことさえできない？
私はそういった。いかにも
——莫迦なの？
軽蔑し
——お前、本当は莫迦でしょ。
嫌悪しているかのように
——知ってる。
タオのかかとか
——みんな言ってるよ。
床をなんどもこする。なんとかして
——あいつ使えないって。
くずれそうな体勢をいじしようと。そして
——性格悪いし。
不意に
——頭悪いし。
わたしは聲を立てて笑った。
——自分が思ってるほどかわいくないし。
身体の痙攣に合わせて
——むしろ臭いしね。
床の髪が
——動くなって。
震える。それが
——謂われたことくらいできない？
床に、なにをかたどると見えない影を
——能なしだね。
ただ複雑に投げた。
——お前みたいな能なしっていうの。
いつかつぶをさらした汗の
——頭の中、蟲張ってるよ。
その雫が二の腕を
——死んで。
落ちた。わたしは
——くさいから死んで。
その肌にのこったかすかな
——生きてるだけむだだから死んで。
きらめきを
——うごくなよばか。
見ていた。もはや
——だからじっとしてろ莫迦。

タオは何の口答えもせずに
——お前、本当にかすだね。
時に
——なんでお前、生きてるの？
いやいやをするように首を振った。
——恥ずかしくない。
わすれたころに。わたしが
——だからくさいよ。
かならずしもなにも云っていないときにも
——本気でくさい。
思い出したように
——あそこの中腐ってるだろ？
タオは頸を振った。彼女の
——本気でやめて。
腹部が波打つ。時に
——死んでお願い。
不意に、あばれるようにわなないて
——だから動くなよ糞。
尻が引き攣る。
——じっとしてろ莫迦。
云って、わたしは蘭をさがした。
蘭はタオの足の先の壁にもたれて、そして目の前にある姦の体軀を見てた。
その痙攣を？
タオが鼻をすすった。
——お前のあそこのほうでさ、妹、みてるよ。お前の。くさくてきたないってさ。
行ったとき、タオが喉を詰まらせるような音を立てたので
——だまれってんだろ莫迦。
詰り、そして私は聲を立てて笑った。
私を省みた蘭に手招いた。
その意味を彼女が解するのかどうか、わたしは不安だった。
蘭は、ややあって、ようやくみをおこし、そしてベッドの傍らに来た。
——そのままにしてろよ。糞。
蘭を見上げ乍ら、私はタオに入った。
——動くなよ。うごく臭いから。
蘭をベッドに座らせた。
——動くな...うごく臭い、穢いもん、いっぱい出て来るから。
ふとももがいやまして痙攣するのだった。
わたしは蘭のふくぶにふれた。
それはいかにも安らぎ、ふくよかに、そしてあたたかかった。
——綺夜宇さん！...と。

タオが短く、聲を殺して叫んだ。
——綺夜宇さん！
掬いを求めるような？
あくまでも、追い詰められた。
もういちど彼女が綺夜宇さん、と叫びかけた時に、タオはその場に失禁した。
私は禁じられた発聲の、その破られた意味を察した。
鼻に、彼女に聞こえるように笑った。
——穢い。
わたしはつぶやき、そして蘭にかたわらに添い寝させた。
タオは猶も、わたしの爲にその体勢に、そして四肢の震えは止まなかった。
蘭は眠ってるわけではなかった。
あお向けて、そして眼を開いていた。
私の耳ははっきりと蘭の立てる寝息を聞いていた。
わたしは眼が眩んだ。
臆てわたしがさらさせた素肌に、私はひとりで蘭に埋没した。
蘭は何が起こっているのか、気付きもしないのは明白だった。
従いもせず、だから抗いもせずに蘭は寝息を立てた。
見開かれた儘の眼は、私をさえ見ていなかった。
眼の前に女がいた。
見たことも無い女だった。
昼間の多迦子の印象が未だに残っていたのかもしれない。
そうではないのかもしれない。
わからない。
女の肌はいや白み、いよいよ白く、そのあたたかな事が連想した雪の温度の感覚の内に、
わたしをただ目舞わせるのだった。
女が痴呆であることは知っていた。
もとから知性もなにもなかった。
だから白痴でさえあり得なかった。
女は痴呆のまなざしのもとに笑みつづけた。
——なんでここにいるの？
わたしは女の耳にささやいた。
——なんで？
お前はばかだよ。
女は云った。
私は聲を立てて笑いそうだった。
女は女ですらなかった。
男の形をそこにさらして、そしてそれは用を足さなかった。
その突起のさきの暗いあなぐらに臃げな青色の太陽を咥えこんでいたから。
お前はかすだよ。
云って、女がほくそ笑んだ。

——なにしに、ここに居るの？

ささやくわたしに女は云った。

俺は世界だよ。

茫然と、云った女の声聴いた。

——嘘つけ。

喰ってみろよ。

女は云った。

俺は世界だよ。

耳元で。

だから私はその唇をめくって、喉に右腕を押し込んだ。

女の喉が鹿の鳴き声のような、こすれる音を立てつづけた。内臓の中を探った。

ほじくり返し、女は笑み続け、触れたと思ったその心臓を引きずり出した。

俺は世界だよ。

女は云った。

ほれ喰えよ。

ささやく。

激昂してわたしは、早口にその耳元にささやいた——知ってるか？

世界？

そんなもの存在したことなど一度もない。

知ってるか？

世界？

そんなもの、...知ってるか？

あまりにも顯らかな存在は、かつていちども痕跡さえ残さなかった。

あまりにも隠しようのない存在は、かつていちども、...知ってるか？

世界？

そんなもの存在し得たことなど一度もない。

知ってるか？

世界？

そんなもの、と。

ささやき手のひらに心臓の脈打つ触感があった。

それを見る木きにはなれなかった。

だから、僕は僕の心臓に、胸の皮膚の上から擦り付けようと思った。

触れていた唇が離れた。

そのときに私は瞬いた。

体の下に、蘭はいまだに目を開いたままだった。振り返ればタオが、いまだに引き攀けながらあの態勢を維持していることは気付いていた。

その肌に傳う汗の匂いを感じた気がした。

自分のそれかも知れないと思った。

すでに明け方にも近かった。

どれほどの間、タオがけいれんし続けているのか、私にはもはやわからなかった。

まだ空の明ける兆しはなかった。

窓の向こうに空も、海も、昏く、そして雲母がゆっくりと流れる。

うつくしい、と思った。立ち上がって窓際に行こうと思った。

私の素肌を月が照らした。

さまざまなかすかなおうとつに翳りが這う。

震えるタオにすれ違いかけた時、私は其の腰を蹴り上げた。

崩れるように、そしてタオの四肢は聲もなく倒れた。

顔れた音が足元にたった。

ぶざまな音だった。

泣き声はなかった。

長く、長く、ひたすらにながく、くずおれた四肢を力いっぱい伸ばしながらタオは息を吸い込み続けた。

8月22日。

夢の中で、なつかしいあなたが振り向いて笑った。

空中に舞う髪の毛に、雨の水滴が散って、それは空間に玉散る。

僕は見蕩れた。

ひょっとして、今日、雨？

(※片岡注記。

以下、すべて22日の記録です。ですから、香香美氏は21日の記録は此処にはつけていない、ということです。

つまり、21日附けの記録はその前日の夜のことから。

一応念の爲、註しておおきます。)

ところで、昨日思った通り、蘭を預けに來たタオはアトリエに來て、カンバスを黒く塗りつぶすわたしに驚いていた。

(二度目の下塗りは、何故かしらないが一度目よりはやく乾く。

何故だろう？ 油彩は、結局は氣候風土に極端に左右される…。

色合いもおもったより濃い、深みのあるブラウンに仕上がったので、三度目はやめて黒下地にとりかかることにした。

思った通り、深みさえ感じさせない素直な黒が現れる…黒に深みがあつてはならない。深い黒は黒くない夾雑物まみれだ、ということを意味する。いちばん深い黒とは尤も浅はかな黒なのだ。

経験から言えば、下塗りの此の段階の黒は乾くのが遅い。

今回はどうなるだろう？

意外に此処ではすばやく乾いて、さっさと定着して仕舞うのだろうか？

念の爲、一日以上はおいて白、さらにもう一度白、そしてその上にもう二度うすいブラウンの被膜を被せ、それで下地は終わり…のはず)

——どう、したの？

タオが云った(半分まで黒く塗りこめられたカンバスを見て)。

——準備。…タオを、描く、準備(これは彼女の話し方の癖をまねたのだ)。

私は笑った。

彼女に下塗りの手順の説明はしなかった。
彼女が理解するとも思えなかったから。
油彩とオイルの腐った油じみた臭気の中に、彼女は笑う。
そして後には蘭が残った。
黒ぬりじたいはすぐさま終わる。
油の腐乱臭の中に、私は黒光る画面見ていた。
乾いて、干からびて、色気が（…油分のこと。科学的には脂分。僕的には色気）ぬけな
いと、思うような黒にはならない。
あなたは雨に濡れたようだが、私は午前中蘭を連れて日に光る海邊を歩いた。
波はさかんにざわめく。
また雨が降るのかもしれないと、晴れ上がったそらに私は思った。
午後。
一時くらい？
ベトナム人たちは習慣として食後昼寝をする。
だから、蘭も当然を昼寝をし始めた。
寝室のわたしのベッドの上で。
いつもの蘭の真似をしたわけでもないが、バルコニーにでて風に当たった。
尤も風というほどの風もない。
見晴るかす海はあまりにも狭く、小さい。
人間の視界の限界。
もしも地球の彎曲にしたがってどこまでまっすぐに（即ち彎曲して？）見通せたなら。
其の時に初めてわたしたちは海の姿を見出すことになる。
結局は我々は誰も海の姿を見た事などないのだ。
…と。
そういませんか？
バルコニーの手すりを蜘蛛が這った。
意外に思う。
このあたりまでも彼等の生存圏だったとは知らなかった。
直射の下に、黒い…茶色い…褐色の…その、複雑に色づく肌を白濁させる。
わたしはまばたく。
振り返って、部屋を見れば部屋の中はさしこむ光の中に物の翳を刻んで、そして綺羅綺
羅しく見えた。
誘われるように、何ということも無く入ると、部屋の中の昏さに目が暗む。
薄暗い。
眼の前に…すこしさき。離れた、伸ばした手も届かないそこ…に、蘭が転寝をしていた。
倒れ込んだよううつぶせで。
——らん、
と。
私は彼女を讀んだ。
——らん、

と。

三度読んだ時に、彼女は顎を起こした。

首をよじって、聲のした方をみた。

そこには当然、私が微笑んでいるのだった。

彼女はそれを自分の名と認識しているのだろうか？

わたしは思う。

——来いよ。

戯れに私は云った。

蘭はわたしを見ていた。

微動だにもしない。

——来いよ。

最初は何の意図もなかった。其の中に、いつか私には使命感芽生えた。彼女を調教、乃至教育してやらなければならない、と？

——来いよ。

彼女に言葉が、さらには外国語など理解できるはずもないので、身振りで呼ぶ代わりに彼女にサイドテーブルの籠を投げつけた。

とっさに除けかねた蘭の頭部を打った。

怯えた蘭が身を丸めた。

——来いよ。

同じテーブルの上の、プラスチックのグラスを投げつけた。

蘭の頭の上に纔かに外れる。

蘭が一瞬遅れ、そして立ち上がった。

だからと言って何をするでもない。

——来いよ。

云って、わたしはアルミのコーヒーカップを取った。蘭の顎を殴打する。

蘭の見開いた眼が私を見ていた。

——来いよ。

云ったとき、はしるように蘭は私に駆け寄って、そして中腰になった上目でわたしを伺い見ていた。

彼女は、結局はなにも理解できていないのだった。

それがわたしにかすかな屈辱を残した。

——逃げ。

わたしは云った。

何でもよかった。何も、彼女のそれを求めていたのでは決してない。

彼女が決して理解できず、偶然には解消できない不自然な行為として、私が思いついたのがそれだったのだ。

——逃げ。

上目の、困惑しきった目が私を見てゆらいだ。

一度だけはげしく。

知性のかけらさえ感じさせない。

かすかにだにも。

——逃げ。

ささやく。

わたしの顔を見上げる。

そのとき、私は彼女の腿を蹴り上げた。

かたくななまでに彼女は踏みとどまる。

倒れない。

手でさすりさえしない。

力み、そしてわたしを見ていた。

なんの意味をもつ防衛行為だったのか？

——逃げ。

地団太をふもうとしたのか、なんなのか。蘭は腿の内側を内またにこすり合わせつづけ、

わたしの拳が腹を殴りつけた時、きっ、と、短い聲を齒の奥に立てた。

鼠がたてたような。

——逃げ。

蘭が、ベッドの上のコーヒーカップをつかんで、走り寄る。

私は尻を蹴り上げた。

前のめりに手をついて、しかし、倒れはしない。

——逃げ。

私は聲を立てて笑った。

蘭は何故かは知らない。バイクのカギを取って私にさしだす。

私がふたたび尻を蹴り上げるのを、蘭は尻を突き出して堪えた。

結局は理解できなかった彼女に、軽い徒労感を感じ、かえり見たその、とがらせた唇を

突き出した蘭の眼差しに、わたしは一瞬の短い激昂を感じた。

なぶるように、故意に彼女の体を引きずり回すようにしながら蘭をはだかに剥いた。

蘭は身を隠すはじらいも無かった。

すでに防衛ほん能さえけっ壊させて、蘭はあまりに無ぼう備だった。

むしろ笑うにちかい顔に、くちもとをゆがめていた。

かのじょがいささかも笑っていないことはしっていた。

つぶやいた。

——死ね。

やさしく、耳元にくちびるを寄せ、

——飛べ。豚。

わたしはつぶやく。

ほほ笑んで。

わたしがベランダをさして、そして指をふった時、... 蘭はそんなジェスチャーなどみて

ゐなかった。

かのじょはただ私のめをだけ見ていた。

なぜ？

——飛べ。

蘭はいっしゅんの後、はしるようにベランダにでた。出ると、彼女はいか放感をあじわったのだった。せ筋をのばし、のびやかにて摺りに身をなげた。

い服にかくされた部ぶんまで、蘭のはだはかすかなグラデーションを描いてかつ色を曝す。

わたしは彼女の後ろすがたをみていた。

ま上ちかくからさす日差しが彼女の肌のぜん体を翳らせた。いや黒み、こく頭はつの上と肩にきらめきの剥奪。

蘭は手すりによじのぼったのだった。

すい直に彼女はたった。

向こうに空はあおく、海ははく濁した。

蘭がちよく立の儘しゅん巡しているのがしれた。

なにというでもなく、直せつ肌にふれたに似ためい快さで。

蘭が振りむきわたしに返りみようとしたときに、むこうにくずれそうになるかの女のうでをひく。

わたしはバルコニーのゆかに蘭を叩きつけた。

背をうった蘭が呼きゅう困難のすう秒にのけぞって、硬ちよくする。

私が腹をふみしだいた時、いっきに蘭は息をはいた。

この女はしというじ態を理かいしているのだ、と。

わたしはその意外をあやしんだ。髪をひつつかみ、あばれる蘭をひきずって部屋にはいりかけたとき「もうやめようよ。」

蘭がいった。

日ほん語で。

「もうやめよう、お兄ちゃん、もう...日本、歸ろう？」

かえりみる。

ななめの日ざしに、半身だけの逆光となって蘭は床にくずれた胡坐をかいて座り込む。

髪はみだれられていた。

私を見ていた。

「妹？」

わたしはささやく。

「俺の？」

蘭に。

——お兄ちゃん、さみしいから、生まれかえってきたんだよ。

ささいた。みみもとで。

蘭が、

——ひとりにしちゃだめだねって。みんな言うから、返ってきたの。...もう一度。

そう云った。

つかんだ掌に髪の毛のからむ触感がある。

足元をみやると、床の上に、わたしに髪をひきずられた儘蘭は失神していた。

口と眼をひろげて。

夕方。

寝台の上に蘭は眠る。

素肌を曝したつづけ。

あれからずっと。

わたしは放っておくしかなかった。

胸騒ぎがした。

見ると壁に陽炎が這っていた。

人間の躯体など留めない。

内側と外側の区別がなく、骨格のあるべき必然を欠いているからだ（内臓が内側で皮膚が外側、と。それらは我々が認識し得るかぎりでの当然で在るに過ぎない。内と外が区別され毅然と存在してゐるなど、ある限られた限界内での妥当性にすぎない）。いわずもがな、それは多伽子だった。

多伽子はその透き通った、わたしの終に「見る」ことのできない眼差しに見つめていたのだった。

壁を這う...

さかさまの蛇のように？

思い出す（何故？）患いの起りたる時之を制すこと薬を以て蛇毒の擴がるを制すが如くす此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——なにしてるの？　そこで

——俺か？...と。

多伽子は頸を反対にねじってささやいき愛欲を斷ちて餘す所なきこと池に生ふ蓮華を潜り取るが如くす比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——俺を迎えに來た？

私は笑い、（まるで彼女を侮辱することを試みたかのように...そんな気はなかったのに）

——お前、だれ？...と。

多伽子が聲をいくつか重ねながら言った時には疾く奔り流るる渴愛を涸らし盡し餘す所なき此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——あんたを殺したじゃない？　忘れた？

ささやくわたしに（でも、僕は思った。彼女はすでにそんな記憶さえ存在させていないだろう。

持っていないのではなくて。もはや存在さえしていない、最初から、まったく...そうに違いない、と。私は思っていた。

記憶をなくす月のかぐや比賣のように)

——お前、誰よ？

多伽子が肛門から顔をだして、そうささやき、笑う。傲慢を抜きて餘す所なきこと大水の弱き蘆の堤を引き抜くが如くす比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——知らないの？　あなたは穢れた。だから僕はあなたを殺した。

私の聲を多香子は聞く。

——あなたを綺麗にしてあげる爲に？...いや、たぶん、僕自身が綺麗になる爲に...

譬え耳はもはやなくとも、多伽子は。諸有の間に精を求めて得ざることを優曇婆羅樹の林中に花を求めて得ざるが如くなる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——お前、誰？

多伽子がなおも呟く。

聲を幾重にもかさねて、それぞれにとよめかせながら、

——どこの誰よ？...と。内に怒りの心なく有又非有の念をも之によりて超えたる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——忘れた積り？

私は猶もつぶやき續けた

——忘れる事さえできないのに？...と。疑念を解き内を斷じ盡し残す所なき此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——あんたは不幸だった。すがった男にさえ輕蔑された。薬まみれの、頭のおかしなあんたは、だから

多香子の眼が触手を生わせ

——穢れるしかなかった、だから、...と。

わたしがささやけば觸手はのびて壁を這い走ること疾きに過ぎず又遅ることなく總て此の妄心を伏したる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——あんたは忘れてないんだよ。あんたの惨めな末路。俺が殺した？...まさか。

私は思った、それ、窓の向こう、雪の向こうの朱のかがやきを、

——俺はあんたを救った。...と、わたしはまばたいて走ること疾きに過ぎず又遅ることなく世間一切のものは虚妄と知れる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——俺はあんたを殺した掌に感じていた。死んでいいくあんたの、...

震える。多伽子の

——首の痙攣を、俺は見つめた、それでもなお、...と、走ること疾きに過ぎず又遅ることなく一切は虚妄と知りて貪望を離れたる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——見つめ続けた。頸の温度 (...せき止められた血、その脉打つ温度さえも)、見つめた。多香子の伸びた舌が二つに裂けて空中に震えた。

——死んでいいくあんたの広げた瞳孔の反射の白濁、...と、走ること疾きに過ぎず又遅ることなく一切は虚妄と知りて愛欲を離れたる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——最期の時にあんたは口を広げた。おおきく...

指。

——阿のかたち大きくひろげ、と。わたしの指はすべて、かすかにふるえているのを已にしりながら走ることに疾きに過ぎず又遅ることなく一切は虚妄と知りて瞋恚を離れたる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——あんたはもはや俺をなど見て居なかった。見開いた眼で、...と。

ささやく私の聲に多伽子は笑う。聲を立てて

——もはやなにも見得なかったろう?...と。笑う多伽子の聲を聞き走ることに疾きに過ぎず又遅ることなく一切は虚妄なりと知りて愚痴を離れたる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——云え。...なんか云えよ。ごめんなさいと?...と。

私は敢えてささやき続け——殺してやると?

——お前なんか死んで仕舞えと?...云え。お前の言うべきことを、と、ささやくわたしにささくれだつた首を多伽子はのたうち皮膚に呼吸を長く吐き墮眠の惑ひ已に彼に存することなく害悪の根悉く断たれたる此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——お前。誰?

多香子は云った。

私は聲を立てて笑い此岸に還り來たりし所以たる怖畏所生の邪業已に一として彼に存することなくてかゝる比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

——お前は狂うたん?

多伽子は云った。

——お前はもう、な。狂うたん?...と人を生に縛す愛欲所生の邪業已に一として彼に存することなくてかゝる比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたる殻を破る如し。

私の笑う声を多伽子は聞いた。故に、ささやくのだった、彼女は

——お前、人の詞もはなしてないぞ、...と、お前、誰の誰の詞もわすれたぞ、と、お前、誰が誰かももう知らんぞ、と。

ささやく多香子はあきらかに私に怯え五蓋を捨て苦なく疑を超え惱なき此の比丘の此岸彼岸を捨つること

蛇の朽ち古りたるノックの音に振り返る。

私は。

タオに決まっていた。

ドアを開く。

タオだった。私を見、そして一瞬深く、表情さえなく深く、見つめ、そして言葉もなにも無くした一瞬の跡に、黄泉がった黒目の色の向こうで、私に微笑んだ。

わたしは已に彼女の爲だけに笑んでいた。

是は寝室の中だった。

故に彼女は寝室に來たのだった。

故に彼女は云った。——どうするの？...と。

——なに？

——描く？

私は彼女の爲に笑んだ。

アトリエに誘導する（むしろ自分が事のそもそも首謀者かなにかでもあったかのように私を誘う）彼女の後姿に、わたしは彼女の身体に昨日の苦痛の痕跡がないこと怪しんだ。もっと、筋肉も筋も傷んでゐてしかるべきだった（すでに彼女が再生してしまったことを感じた。...これは妄想。

わたしだって知っている。是がありえないもうそうだということは）。

アトリエの中の黒ぬりのカンバスの前に立った（是は彼女が、である）。

タオは振り向きもせず（是は私を、である）私にだけに云った。

——真っ黒だね。

転生というもの。そもそもかの天竺に於ては（すくなくとも書物に於て知る嘗ての、である）決定的概念ではあっても我々にとって単にオカルトにすぎないその概念が、常にある人格総体にかかわるものだということは虚妄だ、と。

わたしは思った。

もっとありふれ、もっとかぎりなく繁茂する海の中の単細胞せいぶつのような杜撰さで、それは営まれていたに違いない（...と、わたしはそう思った）。

故、多迦子も私もタオもなにも、すでに恒河の沙ことごくの数の恒河の沙ことごくの數乗の轉生をみていなければならない。

タオがようやくに振り向いて云った。

自分から服を脱いだ。夕方の、没しかけの暗い日差しが黒の色彩さえ持たないままに入り込んで、彼女の肌をくらませながら雲母の白をあきらかにさらした。云った。——どうしたら、いい？

両手を広げて。

わたしは応えた。——いっぱい。...もっといっぱい。両腕が引きちぎれるくらい、いっぱい（たぶん、彼女は「ひき- ちぎれる」の「ひき」を理解しなかった。一瞬の、ほんの須臾、自分が理解できなかったことを認識するまでもに到らないすぐさまに彼女は直感的にすでに理解していた）

タオは私を見てた。

笑み、むしろ私をかたくなに信賴してた。わたしはその信賴に、実際にはなんら内容の無い事には気づいていた。

蹂躪される私を、わたしは感じた。

後ろ向いて。

私は云った。わたしは聞き取ったのだが、わたしの聲は明らかに優しくかった。

ふれる絹のように？

若干、取り付く島もない冷たさを感じさせて？

所詮、だれにとっても他人の。

にも拘わらず、だれかを嫉妬させたほどにやわらかになめらかに。

その儘（——と。

彼女は立ったままだった。

だから、その儘立ったままでいろ、と。

私はそう彼女に命じていたのだった。) 足、拵げて。

ささやく私の聲に彼女が振り向きそうになったので、——見ないで。

わたしはつぶやく。

まるで自分自身の爲にだけ言ったように。

タオが、可哀想に鳴っちゃうから。…見ないで。

と。重ねた聲をタオは聞いた。

聲が彼女の胎内に溶けて行く触感があった。

動揺、…ふるえ。

彼女に、それはついに如何なるかたちも取らずに、ただいたずらに拵がってタオはひそかに動揺した。

タオは私に見えない向こうに笑んでいた。

頭を下に倒す…、と。

タオが聞き取った聲に、そして彼女がまた再びに（何度目かに——かつ）いまさらに羞恥したのが判った。

震える空気を、かすかにかんじとるように？

もっと。

私はささやく。

前のめりに、タオは下に上半身を折って、尻を突き出し、そして太ももを震わせた（精神的な動揺などなにもない。彼女の太ももは傾く不均衡な体制に、それ自体の必然のもとに痙攣を曝した）。

もっと。

私に嗜虐はなかった。

むしろ、嗜虐を感じていたのはタオ自身だったに違いない。

私はその一方で、彼女を憐れんでいた。

その切ない程の健気さを。

足ををね、…と。ちょっとだけ…すこし、ね。…と。折るの…曲げる…すこしだけ…ほんの、ちょっと、だよ。

わたしはタオの日本語を模倣しながら彼女にささやきかけて、そして壁にもたれた。

——恥ずかしいよ、と。

タオがささやきかけたのが分かった。

——しゃべらないで、と。

私が云う前にタオは沈黙した。

私はドー・ティ・ヴィンに着信を入れた。

三度。

彼は気附いた。

だから、三度着信を返した。

ドー・ティ・ヴィンは近くのカフェで給仕する少年だった。19才（彼のIDカード（此処の国民の身分証明書）の成年月日に従えば）。何ということはなかった。私の会計の釣銭

をくすねようとしたのだった。

ここではことごとくテーブル会計である。

12000 ドン（60 円程度）のコーヒー一杯に 15000 ドン（75 円程度）渡した。

おつりはなかった。

わたしは自分の喉の奥に、すこしだけ笑った。

女の同僚と笑うドー・ティ・ヴィンを手招きした。ドー・ティ・ヴィンにはこつきながら近寄った。彼にとってカモだったから？ 私は笑んだ。紙幣を指に数えるのをなぞった、彼等の金銭のジェスチャーを、その鼻先にした。

ベトナム語で言い訳をした。派手に、まるで自分が不当な讒訴にあう犠牲者であるかに。

わたしは彼に微笑をだけくれた儘に、その首根っこをつかんで面の道路に連れ出した。

家畜じみて尻をつきだし、随うドー・ティ・ヴィンのいや家畜じみる痴態が私を侮辱した。多くの人間の眼が（...通りがかりを含めて）彼と私、ことさらにドー・ティ・ヴィンを注視していることに気付いた。

公然と侮辱される。

Growing up in public, growing up in public with your pants down

留宇利伊騰。アンディ戦争孔の弟子。ドー・ティ・ヴィンが上目に、泣きだす寸前の、乞う眼差しをした（誰も仲裁には入らない...同僚も。薄情なのではない。おそらく。

彼等は何が起こっているのか分かっておらず、故に彼の事を見守る眼差しの内には私もドー・ティ・ヴィンも彼等自身もことごとく存在してなかった。むしろ明らかだったのは誰にとっても無関係だった路上の照りかえし、街路の影、そして街路樹そのものの茂りの色、むしろそれらこそだった）。

わたしはドー・ティ・ヴィンの頬をひっぱたいた。

やさしく、且つ、なぶるように。

軽蔑し、かつ彼をこそ悲しむように。

アイ、ディー。

わたしは云った。

アイ、ディー。（ID とは謂わなかった。あくまで彼にとって一切かわりのない日本語で、そういったのだった。一つの嗜虐のかたちとして）

なんども繰り返し、困り果て、ようやくに彼はポケットから自分の手も血の紙幣をとりだす。

わたしはそんなもの見向きもしなかった。

アイ、ディー。

そしてドー・ティ・ヴィンは眼を見開き首を激しく横に振り、やがてベルトにぶら下げたバイクの等キーをさしだす。

アイ、ディー。

唇を突き出して、何か言いかけた。

アイ、ディー。

わからない、と言いたいのだろう。彼等の母国語の...個々の公用語の通用しない（つまりは不当な？）外国人（つまり異形の人？）に加えられる理不尽に、彼はすでに言葉を無くして口を無聲のままひらき、ぱくつかせる。

口臭がかすかにした。

香草のにおい？

アイ、ディー。

尻のポケットから財布を引き出す。なんの感情もしめさない。まさかそんなものではないと彼は已に、差しだす前から已に知っていたのだった。

わたしは財布の中をさぐり、彼の ID カードを引き出した。

財布を歩道に投げ捨てた。

ID カードでドー・ティ・ヴィンの鼻の先を二度たたき、そして笑った。

わたしは彼にホテルのカードをわたした。タクシーに住所を教える時に時々使う…。

ドー・ティ・ヴィンの耳元に、「7、0、4」と。

日本語でささやいた。

三度。

わたしは聲を立てて笑った。

その午後、いまだに日の暮れない（そのくせに暮れのすんぜんという日没の気配の血なまぐさいまで這った）三時。

ドー・ティ・ヴィンはホテルのドアをノックした（彼が来るとは思っていなかったので、わたしはかるく驚いた。ドアを開けたその時に）。

ドー・ティ・ヴィンは一人で来ていた。

尤も、下にだれか（その時にも連れのホアン？）を待たせていたのだろうか？（…知らない。ホアンがいたかどうかなど）

静かにかれは愛想笑いを浮かべ、頭を下げた。

ドー・ティ・ヴィンを中に入れた。

彼はベトナム語で謝罪と言いつを（そのやり方を誰かに教わるか相談し合うかしたのだろう、流れるほどにも流暢に）ひけらかす。丁寧に困惑の表情を曝して。

彼の唇が次になにか言いかけた時にわたしは彼を殴った。

They tied his arms behind his back

To teach him how to swim

はでに身をよろめかせ（まるで身を翻すようによろめかせ）ドー・ティ・ヴィンは省みる。

私は無抵抗の彼の髪を引っ掴んで、顔面に膝打ちし春色の汽車に乗って

海に連れて行ってよ

尻を突き出した尻後退し、壁に立ったまましりもちをつく。

それがドー・ティ・ヴィンを驚愕させる。

のけぞるように（尻に燃える蹄を踏んだバスター・キートンのように）跳ね起きて（顔だけがチャップリンの顔の作りものめいた悲嘆をさらす）見た。

私を。

They put blood in his coffee

And milk in his gin

逃げまどいさえしなかった。ドー・ティ・ヴィンは。彼はわたしになすがままに殴打され、聲さえあげずに、臆てかれが壁に頭をぶつけ何故あなたが時計を

チラッと見るたび

まどの向こうを見上げた（その方向にわたしがいると思ったのだ）切れた唇のにじませた血のかたわらに、その頬の筋肉が引き攣った（まるで、微笑んだようにも？）。

私は彼に受け入れさせた。立ったまま、彼は私に家畜の息を吐いた（尤も、そんな暴力的ではなかった。愛にあふれた不受けでも無かったが）。

ほのかな、ほんとうにほのかで繊細な風景だった。侮辱と、怒りと、絶望と、愛と、慈しみと、赦しと、それらが同時に、乃至交互に重なり合い、うすく、ささやかに、僕たちは互いに心震わせていたのだった——別々に。

あくまでも、遠く離れて別々に）。

Oh, it's such a perfect day

あなたについてゆきたい

I'm glad I spent it with you

素敵な人だから

わかりますか？

When it gets dark, we go home

翼の生えたブーツで

臆て、日が暮れてから彼の眼の前で、彼の持っていたライターで ID は燃やした（ラミネートを溶かしこがしただけ。さすがに、メラメラ燃えるようにはできてないよ）。

ドー・ティ・ヴィンは下僕になった。

震えるタオの臀部と太ももとふくらはぎを見ていた。

息をするのも困難だったのだろうか？

もっと、顎、あげて。

云った時、尻がおおきく震えた。

ドー・ティ・ヴィンがノックもせずに入ってきたのは意外だった。一応はオートロックのはずだった。故障しているのか、入ってくるときにわたしたちが何かのミスをしでかしたのか。いずれにせよ開けられるべきドアが手を勞さずとも開けられたというにすぎない。

友人ホアンを俱づれたドー・ティ・ヴィンは、入って来るなり声を上げた。

——動くなよ。

私はタオに入った。

従順なタオをホアンだけはいぶかる眼で見た。已にわたしに馴れたドー・ティ・ヴィンは聞き取られもしないベトナム語で私に親し気に話しかけ、ひとりでわたしと交友を深めた。

ドー・ティ・ヴィンはこれから何にありつけるの知っていた。

わたしはドー・ティ・ヴィンにだけ顎をしゃくった。

ホアンに、ドー・ティ・ヴィンは話かけてどちらが先にするのか譲り合うのだった。かれらは友人同士だった。

ホアンが、一言もなくに先にはじめた。

ドー・ティ・ヴィンは恠しみつづける彼を鼓舞するようにかたわらに囁きたて、そして笑った。

わたしは立って窓の向こうを見た。

ガラスが暗がりに私をいろもなく反射した。

瞬いた。

タオは聲を立てなかった。

そのままに、太ももを震わせ続けるに違いなかった。

次のドー・ティ・ヴィンは用をなさなかった。照れながら、はじらいも無く笑った。だからホアンをせつつ。ホアンがもう一度事にかかった時に、私はタオののけぞった頸の傍らに身を横たえた。

ささやく。

——いちばん、さいしょに覚えてるの、なに？

彼女にだけ微笑みながらわたしは云った。

——さいしょ、に？

と。

云われたとおりに正面に顎を立てて、黒目だに動かさない儘、聲でだけタオはわたしに応えた。

額に夥しい汗が垂れた。

——おぼえてない、よ。

タオが云った。顔の表面自体が引き攣っていて、もはや表情は彼女に存在しなかった。そのとき、タオが全身に発刊しているのが分かった。

——綺興宇、さんは？

タオが云った。

——俺？

と。ささやく頭の斜め上でホアンがようやく高い笑い声をあげた。

——覚えてない。

タオが笑ったのが分かった。聲はしなかった。肉体に笑う自由は赦されなかった。だから、心にのみタオは明らかに笑った。

——やっぱり、そうだね。

明らかにタオはその全身を以て私との会話を楽しんでいた。そのやわらかな親しみの感覚がわたしに心地よかった。

——最初の記憶じゃない。

わたしはささやく

——なに？

——最初の記憶じゃないけど

——謂って。

——でも、笑う。

——謂って、ね。

——一番最初の記憶なんかないのに

——好き。だよ。

——なんで、最初の記憶じゃない事、知ってるの？

——綺夜宇さんの話、ね。

——笑っちゃうね。

——好き、だよ。
——子供の時、
——何歳？
——十歳？
——十歳？
——...くらい。
——若いね。
——日出登（ヒ、デ、ト）っていう子がいて
——友達？
——ともだち... 同い年。彼、
——仲いい？
——云ったの。
——なに？
——ちかくの神社に...
——神社？
——わかる？
——神社？
——神社。
——わかる、よ。知ってる。日本の、神社？
——近くの...
——有名だから、ね？
——あんまり近くないけど
——知ってる、よ。
——氷川神社
——名前？
——赤坂の...
——知らない...
——そこに、空から天人がくるって
——底ン邇ん？
——天国の人。... 宇宙人？
——宇宙なの？
——来るの見たって。
——いつ？
——先週の週末。叔父さんの家に止まった時に... て。
——いつ見たの？
——嘘だろって、俺。
——友だち？
——違うよって。あいつ、... から。
——ひとりで、
——だからね、あいつ、言い張って。

——見たの？ ひとりで、
——行こう。来るから。毎晩来るからって。
——見たの？
——行ったの。
——二人で？
——抜け出して
——あぶないよ
——六本木の、家
——どこ？
——六本木。
——知らない
——抜け出して。
——夜、なのに？
——行った。
——会えた？
——日出登と、親、寝たあと。
——会えたね、きっと。
——自転車で。
——綺與宇は会えるよ。
——坂がいっぱい。
——綺夜宇さんなら、逢えるね。
——苦しいくらい、坂坂坂...
——誰とでも、
——夜の一時すぎ。
——会えるね。
——神社の木の根っこのところ
——行ったよ。
——端っこの
——わたしも、ね
——座って。
——日本、いるとき
——待ってた。
——行ったよ。
——でも、子供だから。
——兵庫（ひよご）のね
——眠いでしょ？
——神社。
——だから、寝ちゃったんじゃない？
——ねちゃったの？
——そうしたら

——寝たら、逢えないよ。
——匂う...
——残念、だよ。
——花の匂い。で、
——可哀想、だよ
——見えた。いっぱい
——会えなかったら
——蓮の花、浮かんでるの。
——綺麗？
——匂う。
——綺麗だった、ね。
——いやになるくらい。
——きっと、ね。
——鼻に搦く
——綺麗だった、ね。
——光ってるの。
——なにが？
——花が。
——光の？
——だから、
——きっと、ね
——日出登、逃げちゃった。俺
——それ、ね
——逃げなかった。
——綺夜宇さんが、ね
——逃げらって、そういう...
——綺麗だから、ね
——それ、忘れてて
——綺與宇さんの、ね
——上から、光。
——心が、ね
——月から、ね。
——綺麗だから、ね
——光が落ちてきて。
——きれいなんだよ
——音立てて。
——どんな？
——光が、で、まわり、明るいじゃない？
——うるさいの？
——だから。光で

——きこえちゃうね
——明るいじゃない？ だから
——みんなに
——まぶしいの。
——聞こえちゃうね
——目の前に、見たことない女の人いて。
——誰？
——顔、なくて。
——綺麗？
——あるけど、見得無くて。
——綺麗、だった？
——見たこと無い顔だから。...見得無くて
——綺夜宇さん、みたいに、
——ないんじゃないよ。...あるけど。
——綺麗、だった？
——で。
——逢えたね
——話してくれるけど、なにも
——宇宙の人だね
——わからない。外国語？...
——よかったね
——だから。
——会えたね
——匂うの。
——もう、ね
——いい匂い。
——可哀想じゃない、ね
——だから。
——会えたら
——ぼうっとしてた。
——可哀想じゃない、ね
——朝、神社の人に
——だれ？
——神主。
——誰の人？
——神社の人
——迦牟奴志？
——そのひとに、起こされて。
——知らない
——神社の真ん中。手、あらうとこの近く。

——誰？
——親、呼ばれて
——誰？...それ、
——すっごく、叱られた。
——お母さん？
——日出登、なにも話さないから
——綺夜字、さんの？
——昨日のこと、だから
——お母さん？
——お互いに、お互いにも秘密にした
——綺麗だね
——だれにも言わなかった
——綺與字さんも、きれいだから
——だから、タオにだけ
——じゃ、も、秘密じゃ、ないね。
タオの息に乱れはなかった。
——わたしも、知った、ね。
脂汗の玉が密集した顎に垂れた。
——秘密じゃ、ないね。

とうとう、ドー・ティ・ヴィンが何度目かの挑戦で用を果たした時に彼は私にもホアンにも眼差しで自分を誇った。或いは、彼が大人になった日だと？

私は彼にその気も無く笑んでやった。

ホアンに金をわたした。あとは好きにしろ、と。祝杯でもあげとけ、と。ビールを飲むジェスチャーをした。座り込んでスマートフォンを弄るドー・ティ・ヴィンを残してホアンは出て云った。彼がビールを箱で買って来た時に、彼等がここで酒宴をする気なのに気付いた。

タオはそのままの体勢を維持し、汗と痙攣に塗れた。

ドー・ティ・ヴィンが私にビールを勧めた。慇懃に断る。

私は優しかった。

だからドー・ティ・ヴィンは一瞬で気を赦した。部屋の隅で酒宴を始めた彼等のあけすけな声が響いた。

ドー・ティ・ヴィンがベトナム語の哥を歌った。

Cha yêu ln nao bit ra làm sao

Bit trong tình yêu nh th nào

窓の向こうに昏い空は、ひかりとして室内のものに触れれば火照りをのみ残す。

Sông sâu là bao nào o c âu

Lòng ngi ta ai bit có dài lâu

タオ震える、半開きの唇に呼吸の音が聞こえるに違いなく思った。

Qua bao thi gian sng trong bình an

L yêu ngi ta gieo trái ngang

耳を澄ました。

Nông sâu tùy sông làm sao mà trông

Chà bn bit ni nào c trong

私は立ち上がった。

ホアンが記念にか、月翳にななめに光るタオを、スマホに収めた。

タオは反応を示さなかった。

あるいは、心をは曝さなかった。

私への従順の證しに。

寝室に戻ろうしたわたしは、不意にタオを思った。

振り向き見た。

云った。

タオに。

——見てるよ。

と、

——離れてても、

ね？...と。

——どんなに遠く

ね？...と。

——思ってるよ

ね？...と。

——タオを

ね？...と。

——見てるよ。

私は寝室に戻った。

寝室に蘭はそのままの格好で（...その儘の姿勢で？ おそらくは。尤も、元の姿勢の記憶などわたしには何もなかった。きれいに、完全に忘れられていた）蘭は天井を見ていた。見上げた。

かげろひのように。

朝の靄に燃え上がった日昇の紅蓮のかげろひのように。

しかも、色彩など光のあわい白み以外にはなくて。

天上に水を反射した陽炎が泳いでいた。

海？ と。

こんなところにまで海の面の光が反射するなど？

わたしは白いかげろひの揺らめきを見た。

壁中に白い影が出鱈目な躯体の儘に這い上った。

陽炎の群れがつぶやいた。

叫べ、と。

無数に、無際限に聲を重ね、

叫べ、と、——なにを？

ささいた私の聲は聞き入れられなかった。

彼等はつぶやく。

叫べ、と、まばたき、あさのひかりは己に斜めに私の睫毛に触れていた。

眼の前のベッドの上で、蘭はひとり身を起こし、積み上げた枕に背をもたれた。——起きたの？

わたしは思わずタオに云った。

蘭は応えなかった。

近づいて、蘭の頭を撫でた。

顔を上げた。

黒目が雙つあった。

云った。

「日本へ行く。」

ささやくように、——歸るの、と。蘭は、

「海の中に…」

と。…あるじゃん？

「あるよ…」

——ね？

と、蘭は、…燃えるお城。

「あれ…」ささやく。蘭が、「あれ、…さ」

燃える、海の中お城。

——日本に歸る…と。

ささやく蘭の聲（…それが日本語ということにも気付かずに）をだけ、私は聞いていた。…思うに、其れは誰かが、（例えば、多伽子が？）彼女に憑依したのである…

わたしは、そう思ったのだった。

諦めるように（事実、わたしは何をとんでも顯らかに其の時に、心にはっきりと諦めたのだった）わたしは蘭の頭から手をはなした。不意に眼差しによこなぐりに光が——色も無く、侵入して、思わず息を吞んで振り返れば、窓の向こうに海と空が朝焼けた。その紅蓮。

燃え上がり、且つ焼けおちるような。

破滅的な？

あざやかな一日のはじまり。

タオを思い出した。

アトリエに入った。

タオが云われた通りの体制の儘痙攣し、朝日に染まっていた。

ドー・ティ・ヴィンとホアンは空き缶もそのままに、すでに立ち去っていた。

タオの頭の近くに胡坐をかいた。

わざと、音を立てないように、そっと。

タオを見ていた。

何度も失神、（——乃至、転寝）に落ちかけながら、彼女はその度まどろみに醒め、そしてそれを繰り返した。

うつろな、ぼやけた深刻な闘争と葛藤が、その朧げな意識に繰り返されているのだった。

穢いね。

わたしはささやく。

タオの耳は聞いたに違いない。

穢い。

笑い、そして私は

——タオ。穢い。

彼女の爲にささやいた。

おおきくゆらめいて、そして彼女が向こう側に倒れたと思った。タオは身を立てて、そして私の左手のほうに立っていた。

息を吐いた。

——もう、終わった？

聴て、タオがささやく。

——行く、ね。

タオが身をくねらせ、光に赤らみながらそのままに服を着始めた。

表情はむしろ、いつにもまして私にやさしく、やさしく媚び、媚びて甘え、甘えてやさしく、彼女の言った言葉の鼻水を咬むような聲を思った。昨日（——21日に、最後に見せた例の、何かも失ったような顔...追い詰められた挙句の女はかならずそんな顔をするのだ。

それ、歎きも悲しみも愛しさも不満も報われない切実さも絶望もなにも、通り越してひとり勝手に素顔をさらした、そんな、無表情でさえない表情のない赤裸々な顔を。）

昨日見せたその顔の名残はもはやなかった。

餘に自然に、疲れた心身をいたわりながら彼女は服を着、私をなつかしみ、離れがてにしながら部屋を出て云った。

ドアを閉める時、ふたたびふりむき、わたしに笑み、媚び、そして失せた。

文書 6

文書 6

文書 6（清雅文書 C）

記。

是吾之最後 遊觀維耶離
將遊彼泥洹 不復受有身

圓位あて。

佛稱此末後 身行極於斯
若遂淪清虛 於何覩聖來

腐れ坊主の圓位あて。

久村に紹介される。もっとも、先方は私を知らない。久村が彼のアドレスを教えただけのこと。

敬謁法王來 心正道力安
最勝號爲佛 名顯若雪山
譬華淨無疑 得喜如近香
方身觀無厭 光若露耀明
唯佛智高妙 明盛無瑕塵
願奉清信戒 自歸於三尊

○圓位宛て、清雅文書 1（序）

（阿輪迦王から并餼に。メール、2019 年 9 月 02 日）

敬すべき圓位師。

阿憂迦王の歸り來たりのかたちから并餼の歸り來たりのかたちに挨拶します。

如何？ お健やかでいられるか？

あなたの久村氏からあなたが紹介されるよう乞われた次第。

東の最初の須冥呂岐殺しの轉生について。

如何となればあなたは私に助けを乞うだろう。仕方なければ事の成るまま事のまにまに、である。

ご健勝を。

（并餼から阿輪迦王に。メール、2019 年 9 月 02 日）

香香美清雅様、で、よろしいでしょうか？

綺麗なお名前ですね。

先ほど久村教授に連絡させていただき、香香美様のお噂を拝聴した次第でございます。

非常に知的な方でいらっしゃるのか。

久村教授から件の眉村真夜羽について相談があったとのことですが、いまのところ眉村家は平穏無事。

なにごともなく治まっているようでございます。

尤も、我々にとって希少なケースですから、繊細な注意が必要と思います。

ぬかりはありません。狭い島ですから、なんでも話は入ってくるのです。

なにかありましたら、久村教授の方から連絡が入ると思います。

ひとまずはご安心なさってください。

神の愛で給う鄙の神さびの島から、遠く、ご活躍をお祈りしております。

(阿輪迦王から并餽に。メール、2019 年 9 月 02 日)

法師。

実はあなたとは夢の中ですでに長く語らいました。

あなた自身についても。

時はもうすぐ来るのです。

あなたはそれほど待ち焦がれなくてよいのでしょうか。

(阿輪迦王から并餽に。メール、2019 年 9 月 02 日)

まずあなたが注意すべきは今月の 15 日ばかりのニュース（あなたが目がお弱くて映像しか見れないならテレビの、あなたがさらに目がお弱くて耳にしか聞けないなら懐かしのラジオの、もしくはあなたがさらにさらにお眼がお弱くてらして活字しか読めないなら新聞を、またはあなたがさらにさらにかさねてさらにお眼がお弱くていられてフォントしか読めないならインターネットの）。

大事件じゃない。なにもトランプ氏がホワイトハウスで首吊った下でバッファロービルが馳を追い掛け回すとか、そんな混乱ではありません。

彗星も落ちてこない。

海も干上がらない。

けれども、人々は素敵な風景を見たのではないですか？

その時に。

(阿輪迦王から并餽に。メール、2019 年 9 月 02 日)

師よ。

夭夭たる菴摩羅女のふたたび來たるかたちたる方。

長く尾を引いて落ちた光よ。

夢を見た。

蓮の花を喰らう虫がいる。

放っておけ。

彼のその、命の尊厳をいつくしむ爲に（すでに、彼は唇だに朽ちていた）

追記。ふと気づきました。

佛像になった瞿曇王の頭にのせたあれ。

あれ、無憂樹の花じゃない？

思うに、あれは花冠りなのです。

故、あれはあざやかな、白をはかなくもかんじさせてもはや紫薫る眞紅として、總てことごとくに塗りなおされねばならない...

(并飢から阿輪迦王に。メール、2019 年 9 月 03 日)

失礼ですが...忌憚なく。

最初、なんとも変わり者から連絡がきたものだと、そう考えていた次第。

尤も、いまでもそれはそうなのですがね。

世を捨てた住職と謂うのは実はだれより世の中を憂い見ているので...つまりもっとも世俗に著した者ならんや、という逆説の成り立つ故にか？ あなたに非常に興味を持ち始めたのです。

まさに失礼な言い方。動物標本じゃないと憤慨されるでしょう。

とまれ、姿を見せあいお会いして居なければ自然標本同士の探りとなる始末。

今に至る迄ドストエフスキー氏とスタヴローキン氏が同じ活字標本として等価に扱われるに似て。

同じ活字ならシェイクスピア氏もハムレット王子も同じ事。

久村教授曰く（助教授、らしいですね。もったいない限り）近日帰国されるとか。

勿論、かの嚴島眉輪王の居城にもお詣りでしょう。

その日お会いできることを期待しつつ、それまでの無聊の慰めに、あなたの事のなにかでも語ってくれますまいか？

活字標本（失礼、正しくはフォント標本）に、同じ標本の一例として。

では。

○圓位あて清雅文書 1

(阿輪迦王から并飢に。メール、2019 年 9 月 03 日)

Mit Andacht

Von Herzen-Möge es wieder-Zu Herzen gehn!

心から心に

師にしてその花の翳りに伸びた同じ莖に馳て成る實たるあなたへ。

告白は繊細にそれ自体ひとつのフィクションとしてなされなければならない。思うに命は永遠にうつろい留まらず送りつづける大河そのものに他ならないから。

今私が語るのがその總てだとは、師にして同じき弟子なる人よ、思わないでくださいとかえすがえすがえすも願いつつ引くのはこの哥

梅花零覆雪乎畏持君令見跡取者消管

宇米能波那

布利於保布由伎乎

都都美毛智

伎美邇美世牟登

登禮婆祁邇都都

父の記憶はありません。何故なら彼は慥かに存在しながら私には顯れようがなかったから。

70年代の半ば、思えばオンド・マルトノも新進機材だった頃（すくなくともメシアン愛好家にとってはね）。

代々木の八幡の丘の影さす家屋の二階でインド人だがパキスタン人だかチベット人だかの物取りらに、忍び込んだついでに強姦された少女がいました。

知りませんよ。本当の所は。その少女、即ちわたしの母ですが、彼女は言っていたものです。そのひとり息子に、——夢の中に、金色のいい匂いのするお坊さんが現れて、そして口の中に入ってきたのだ、と。

春正月朔甲子、夜妃夢、有金色僧、容儀太艷、對妃而立、謂之曰

「吾有救世之願、願暫宿后腹」

天竺からのお坊さんだよ、とね。

ですから、わたしはさっき言った人種を仮に上げたのです。一切、差別的な言いがかりではありません。寧ろわたしが日本人をこそ下等まれにみる劣悪と斷じているのは久村も証言する事実です。

わたしの幼児期の記憶は母の歌聲と共にあります。

見張り塔の上から声がする。Wachet Auf, Ruft Uns Die Stimme、いま花婿來たと聲がする。僕らを呼ぼう声がする...と。

Zion hört die Wächter singen,

Das Herz tut ihr vor Freuden springen,

Sie wachet und steht eilend auf.

Ihr Freund kommt vom Himmel prächtig,

Von Gnaden stark, von Wahrheit mächtig,

Ihr Licht wird hell, ihr Stern geht auf.

Nun komm, du werthe Kron,

Herr Jesu, Gottes Sohn!

Hosianna!

Wir folgen all

Zum Freudensaal

Und halten mit das Abendmahl.

見張り塔から聲がして

シオンの心もおどりたち

立ちいそぎゆく

高みより、高みより來たる

まことと愛の、まごころの君

み光あかるみ來たれイエス

神の御子

ホザンナ我等も

俱にはべらん

それ、幸なる宴、その婚禮に
母の謠い給ひし日本語歌詞は忘れたけれども、...あれ。親愛なるヨハン・セバスチャン、
小川の反映の光のまばたき。
母が私を生んだのは十六歳の時。
だから、母曰く天竺の金色の誰かさんが愛の挨拶をしたのは十五歳の時かな？ 母はその
両親の反対を無視して私を生んだのでした。つまり、やさしく母の行く末を案じた（一面
に於て、すくなくとも、そういうことでしょうか？ 厄介拂いの側面もありますね。ただ、
わたしには彼等の心がわかります。その懊悩、葛藤、嫌悪、その他、母への同情、哀れみ
も。故、糾弾する気はないのです）親族たちは結果としてわたしを殺し損ねたわけです。
事の経緯は私もよく知らない。
結果、物心がついたときは私は母と彼の最初の恋人と千葉に居た。
どこかは知らない...記憶にない。たぶん、霞が浦の周囲じゃない？
大きな霞む青空のいや白む下に、静かな水が大量にあふれそうにも湛えられている。綺
羅らぐ反映のひかりがちかちか、いっぱいに散って、だから海に行く、海に行く、とそ
ういったら母は笑う、——あれ、海じゃないよ、とね。
海みたいだけでもね
臆ては海につながるけどね
あれ、海じゃないよ
とね。
八歳くらい？
引っ越した。なぜなら、母の男が変わったから。彼、東京の人で。母と僕に六本木のど真
ん中の、旧防衛庁（今、三井が再開発したところ、...ね。尤も、あなたが単に瀬戸内周
辺の坊主だったらご存じない。しかし宮島があなたにとって流浪の果て辿り着いた他人
の島だったら？...或いは、お詳しいかもしれない。櫻。綺麗だったでしょう？ あそこ。
花見は忍び込んだビルの屋上でするものです）近くのマンションを与えて。
其処に住んだ。
多分、彼の投資用の資産だったんじゃないですか？ 賃貸用の分譲ワンルーム。事務所向
きの物件。ただっぴろくて、頻りも無くて、バス・トイレ同じ。
すこし、懐かしいけど。
不幸なことには母がもう一度金色の誰かさんに忍び込まれたことだ。
その夜に、僕は物音に目覚めた。
ベッドの中には僕の気配しかなかった。
母は流しの近くに立っていた。
後ろに昏い翳りがあった（...すくなくとも、そう十二歳の少年の眼は記憶した）。反対に
あざやかなのは母だった。
ひとりで母だけが際立っていた（まるで何かの供物が奇蹟的に差し込んだ一筋のひかり
に照らし出されたかにも似て？）。
窓からの光が母だけを出らして居た（嘘。そうじゃない。手当たり次第、いつものよう
に照らしながら、母も差別なく照らし出されいたのだ）。
逃げようとしたのだろう。

母は後ろから翳りに占められていた。
怪しんだ。
餘に華奢な人影だったから。
そこにいるのが僕と同じくらいの子供だとあやしんだくらいに。
孤独に際立って目を見開いた母の眼があった。
僕は助けようという氣さえ起こさずに母を見ていた。
どれだけ時間がかかったのだろう？
人はなかなか死なないものだ。
僕ははっきりとそう悟っていた。
臆て、いつという切っ掛けもいつという記憶もないなめらかなだけのその時に、母は崩れ落ちた。
手を離したから。
僕は母を見ていた。あお向けて、大腿を開け、腰をひん曲げたように倒れて、そして一度起き上がりそうにもゆらゆらして、そして、とつぜん雪崩れた。
母はのけぞって横たわっていた。
騒音が耳にした。
見ると部屋の中はただ静かだった。
翳りが部屋から走り逃げたその時のドアが鳴り響いた音だったのか。
遠ざかる足音がいつまでも聞こえ続ける気がした。
母をまたぎ、見下ろす。
そのとき、僕は自分が翳りのしたことの模倣をしている気がした。
ぞっとした。
母は死んでいたに違いなかった。
確信がなかった。母は實はすでに死んでいたに違いがないと思った。二度殺されたのだ。僕を宿らせた時の、あの十五歳の時。そして今。だったら彼女はふたたび生き返って再び苦しみの多い生を繰り返すに違いなかった。
堪えがたかった。
僕には。
僕は母の何時も使った包丁をつかんだ。しっかり母を見詰めながら、その目に突き刺した。深く。抉るように。
もう二度と目覚めないで済むように。
右の眼も。
僕は自分で通報した。

Kommt, ihr Töchter, helft mir klagen,
來たれ娘ら、俱に歎かん
Sehet -Wen? -den Bräutigam,
見よ。...誰を?...その花婿を
Seht ihn -Wie? -als wie ein Lamm!
彼を見よ。...どちらの?...子羊のような！
Sehet, -Was? -seht die Geduld,

見よ。...何を?...彼の忍耐を

Seht

見よ。

僕は泣いても居なかった。動揺しても。僕は僕の心がただ静まりかえるのを聞いた。

- Wohin?

...いつこを？

雫さえ垂れず、波紋すらたたない

-Wohin?

...いつこを？

昏く澄んだ水の面を

-Wohin?

...いつこを？

ひとり見た。

-Wohin?

...いつこを？

言葉も無く

-auf unsre Schuld;

...我等の罪を

大人たちが事の始末をつけて行くのを。母の亡骸からさえ隔離されて。僕を阿波元方氏が引き取った。部屋の家主、母の二十七で死んだ母の四歳下だった。

彼の阿波家に引き取られて、元方氏の家族の中での立場が思い知らされた。我が侬で、手の施しようがなく、資産食いつぶしの元凶、と。大学在学中に子持ちの女と睦みはじめたのだった。籍も入れない儘その遺児を引き取るという。一課の不協和音そのものだった。家はそれなりの資産家だったが彼には手持ち資産など十数万円の貯金しかなかった。勤務二年足らずに使わずにまた残ったのは金、という意味の貯金、ね。

彼は親に縋って...ないし、詰り怒鳴りちらすことによって僕を養育した。

大学には行ったときには彼の保護を離れた。彼の意向にはそぐわなかったけれどね。学費は彼が出した。大学で国文学を（尤も非生産的な学科ということで選んだ）学んだ。一年半だけね。そこで出逢ったのがかの久村氏です。ほとんど大学には顔を出しませんでした。

夜のバイトが忙しくて。ホスト。勧めたのは久村ですよ。放っておいても女が寄ってくるんだろ？ いいんじゃない？ って。

それから 26 歳ぐらいで目が覚めたように絵画にめ覚めて...即ち、自分の描くべき絵をはじめ知ったんです。...實はそれまでもペインティングでそれなりに名が通っていたのですが、それは迷いの中の、いわば雛のよちよちあるきの眼差し。

巢籠の中のね。空を知った鷺がもう一度巢籠でひよこと窮屈に共に休もうと思うのでしょうか？ 巢に替えるのは鮭だけで十分。自分の縄張りでしか生きられない蚊や蠅のようでありたいと思いますか？

もっとも、誰も理解しませんが。

敢えて隠しませんが、所謂精神病院というのに出たり入ったりしたのは事実です。中学

を留年しているくらいですから（母親の事件で、保護という名の不当な拘束にあってたのです）なんども、繰り返し。

なにも面白いことはありません。

患者体も見慣れれば退屈なものです。せめて自分の舌でも引き抜いて裸踊りでも踊ってくれば面白いのですが（...所謂狂人とあなた方にはあなた方と狂人たちが思う程の差異はない。四本脚の犬と三本足の居ぬほどにも違わないのです）。

ところで、さっきから憂鬱と冴えた感覚が同居します。何故？

自分の事を語るのは、思った以上につかれますね。

ぼくに、僕の心がつぶやきます。

Blicke mir nicht in die Lieder!

Meine Augen schlag' ich nieder,

wie ertappt auf böser Tat.

わたしの歌を覗かないで！

まるで悪さでもしてみたい

うつむいてるしかないみたい

追記、次はせめて未来について話すべきでしょうね。ぼくらは。

○香香美あて圓位文書 1

（并餼から阿輪迦王に。メール、2019 年 9 月 03 日）

Ich atmet' einen linden Duft!

Im Zimmer stand ein Zweig der Linde,

ほのめきたつ香りを嗅いだ

部屋に菩提樹の小枝があって

Ich atme leis in Duft der Linde

der Liebe linden Duft.

香りただよい舞ううちに

そっとほのかな愛の香を嗅ぐ

いまも遠い異國の地... 南のブーゲンビリアとプルメリアの花の影落とす海辺にお住まいなのでしょう。

初秋、未だ紅葉の色の前触れもない残暑の東國にひとり羨ましむ次第。

不思議に、いつかあなたに奇妙な親しみをさえ感じ始めます。

あなたの話を拝読して、ふと思い出したことがありました。

つまらない説法を始める気はありません。あなたには不用でしょう？ 又これは私にとって個人的な話でもなく、さらに言えば一部で有名な話です。ご存じかも知れない。

広島原爆投下の直後に附近の収容所に収容されていたということなのでしょう、市街地の電柱に針金で張り付けられた米兵の死骸が転がっていたという話。

おそらく、原爆直後の混乱の中... 文字通り

海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍

海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍

の惨状が市街に拡がる譯で、その悲惨は思うに想い描き得ないものだった筈ですが、そ

の中でおそらくは被爆しかつ被爆したかたがたっかのリンチを喰らった、ということなのでしょう。

ある人の曰く、気の毒に異国に死ぬ、と、そう思ったと。ある人の曰く、こみ上げる怒りと共に石を投げつけたとね。

ここからさまざまな教訓を引き出せるでしょう。

また、人はそうすべきでしょう。

ですが私はそれ以前に、彼の最後に見た風景を思うのです。

内地に住む人でさえも阿鼻叫喚の爆風、熱風、破壊の嵐と業火の内に、周囲に立つ異国語の響きと死穢の群れの中で。

彼は何を見ながら死んだのでしょうか？

私には死んだ者もそれを憐れんだものもそれに石打った者も、すべからくひたすらにただ痛ましくならないのです。

これはこちらに流れ着いてから、広島の方に出向いたときにふと伺った話でした。未だ自虐史観という言葉も席卷して居なかった頃のこと。

また、こんなおばあさんにお会いしたことがある。是は、この島で。こちらの沙羅樹院のお世話になり始めてからですが、島の祇樹古藤記念園という事前施設に入院された息子さんを見舞いに来られた方で、おばあさんと云えども今思えば今の私よりもはるかにお若くてらして。年のころ 60 ばかりでしょうか。

四十近い息子さんがどうにも今に言う鬱のひどいの？...察するに、関東の医者に薬づけにされた被害でということみたいです（是はそのおばあさまが暗に仄めかされたのを察しただけ）ま、お世話になられると。

お若くていらしていたわしい次第、こちらの同情もひとしおのところお伺いするに抑々の因縁、息子さんの飲酒運転が因のようでしたようで、飛び出してきた子供を引き殺して仕舞ったと、跳ね飛ぶ幼子の姿が思い出されて鳴らないところにその子、ひとり子でらして三十なかば超えてようやくに恵まれたお子だったような話。

ご両親もなかれるわけですね。

頭を下げに入ったがよいが、飛び出しは飛び出しでして、且つはその運転手のほうもなにも泥酔したわけでもなし、友人の家の新築祝いで昼間一滴二滴およばれたに過ぎない由、親ごさんも年の功非常におできになった方でらしてなにを責め咎めるわけでもないのがむしろ一層身中を搔き毟られ曳き裂き苛まれる悔恨のみ感じさせ、どうにもいたたまれぬ、と。

香持つ手も震える次第のしだいしだいにお心を病まれて。

終に島に渡られたということを語られるうちに不意におばあ様曰くに、...なにを恨んだんならいんでしょうかと。

私は若くて、そのときにはいいえ何も恨みますな、何も思うますな、何をも咎めなさいますとね、しかれども、口ではああは殊勝な得意顔にお聞きになられながらに庭に出られてしばし散策するときに、ふと、それでも、いっそ狂ってしまえばいいと。

息子さんも、わたしも、いっそ狂ってしまえばいくらかは...とね。

あなただったら、なんといわれますか？

私はただ、ひとこと言うに、花がきれいですな、と。

時はちょうど夏の終わり、寺本堂両脇に沙羅の樹（タイの國に言うサーラの木）が地から湧きたつように咲いていて、我々日本人にはなんともグロテスクな花でございますが、咲いてますな、と。

おばあさん、そうですね、と。

そして、結果、どうなったか？

それだけ。おばばさま、其れから日の高いうちに歸えられて、愚僧、翳りゆく庭を見るときもなく見て何をはかなむともなく、心に思いの形の纔かにだに結ばぬ始末、なんとも。

生生生生暗生始 生れ生れ生れ生れて生の始めに暗く

死死死死冥生終 死に死に死に死んで生の終りに冥い

又時代も場所も異なるいつかに誰かが

Jetzt nehmt den Wein! いまこそ取れその盃を

Dunkel ist das Leben, ist der Tod! 生は暗く死も又昏い

尤も、空海の昏いとはわからぬ、ということで、マラーとハンス・ベートゲの翻案李白のは其の儘存在否定の暗い、ということで、違いは違いとして決定的に違いますがね。ところである友人がいた。島のおじいちゃん。是はわたしの年上だったひとで、もうなくなられたけれども、ご健在の比はわたしのへたくそな尺八をいいといわれてね、習いにこられて、時に哥の話になって頃は櫻もさかない今の如月、西暦の二月ね。いまのひと、わからないのね、櫻は如月、と、いってもそれは二月でしょ、と。とまれ櫻の蕾も無い中にそんなふうな話のあいだに言われたのがそれ、櫻を憐むのは唯の阿呆ですよ。なぜ？

だってあれは櫻にとっちゃ枯れ木なす冬からの目覚めのくしゃみのようなもの、飽く迄そのあとの新緑の茂りの魁でしょう？ どこに花さく一週間のうちの爲にだけ一年凌ごうちう櫻がありますかと。それ、人が阿呆で勘違いに憐むだけ、すこやかな大樹の目覚めのくしゃみにすぎませんとね。

其の新緑も濃く成るだけ濃くなって、もうそろそろ散り時をさぐるころあい、庭の沙良もすでに花散らし終ったところ。

Ich bin der Welt abhanden gekommen,

わたしは此の世に忘れられ

Ich leb' allein in meinem Himmel,

in meinem Lieben, in meinem Lied.

私の至福の、私の愛の

私の歌のうちにのみ生きる

花の心木の心、察したと思うそれこそ人の阿呆、そんなものかもしれませんが。

以上、ただとりとめもなく。

○圓位あて清雅文書 2

（阿輸迦王から并餽に。メール、2019 年 9 月 04 日）

今更雪零目八方蜻火之燎留春部常成西物乎

伊麻沙羅邇

由伎布良米夜母

迦岐呂比能

毛輪流波留倍登

那利丹志母能乎

嚴島沙羅樹の翳りの師に。紅葉を待つあなたにとっておそらくは季節感を大きく外した歌に始めることを詫びなければなりません、尤も常緑樹の下げた蔭の翳りに隠れるここにいるかぎりあなたに身近かの季節感は抑々存在しはしないのです。

個人的な追憶として、海を渡る時にわたしが唯一日本から持参した書物は萬葉の校本一巻でした。やまとうたはひとのこゝろをたねとしてよろつこのことはとそなれりけるといのは事実だったでしょう、ともあれその種に生じた葉を見る時にだれがその種の形を見匂いを嗅ぎ色を見るでしょうか？

わたしが萬葉一巻を持参したのはひとのこゝろのざわめきそのものから離別するためだったに外なりません。あなたはむしろ山に離れることによって花の色を見ようとするのでしょうか？ 久村のわたしに傳えたことが事実なら、願わくば山に遠く見る花の翳りの下に添うて死のうと？

花の翳りの色の、あなたにそれ以上のあわく且つは解き難い陰影を沁まさぬことを願うばかり、なぜならあなたのような人こそあれよりも傷つきやすいはずですから。ところで、師よ、未来の話です。

誰が何と言おうと画家であるわたしは（仮にまともにさくひんを発表しもしなければ故に称賛されることのない...とは言え、罵倒と軽蔑だけ身に浴びるのはいかがなものでしょうか？ いずれにせよ、私が私を画家としてこそ認識していることは事実だったのです）その影の翳りのもっとも深い處で革命家だったのです。それは久村も知る王黄という片足の自稱中國人に焚きつけられたことだったかもしれません。おそらく、王黄は我々すべての（時ならぬほどに寵愛され金銭援助さえ受けた久村を含めて）彼がわたしの子供と呼んだ青年たちに、かの拠点たる赤坂の彼の持ちビルの最上階事務所での偽名と信じられ疑われなかった名前と呼ばれながら、左右色の違う目で我々にやさしく微笑みかけた。おそらく彼は父親として存在せずむしろ母親のように存在しようとし、そしてむしろ口うるさく同時になげやりな姉のように存在することに不本意ながら成功した、そう謂えばいいのでしょうか？ 或いはあなたが興味あれば久村に尋ねられればよりこまやかで私のように恣意のない王黄のイメージを鮮明に与えてもらえるでしょう。わたしがあなたに与えられるイメージは久村のデジタルカメラによる解剖映像の如きではなくて、むしろ短編時代のグリフィスのモノクロームの古い映像に近い。リアン・ギッシュの高貴さのない王黄は、もちろんときに聲を立てて笑いながら窓越しの光にその表情を刻ませ、邪気もなく云った。

あなたたちは、もっと、あたらしい風景、みなければね。

彼のお気に入りたる私たちは彼の言葉に耳を傾け、そして又王黄は云った。

あなたたちが見るの、それ、あなたたちの風景、...ね？ それは、ぼくの見た風景、違う...ね？

声を次第にしだいにひそめつつそう云って

そうでしょう？

彼は笑った。はじめてあった時から彼の傍らに添うていた少女、...もっとも大きく見積

もって上限十八歳未満、その華奢な浩然（…ハオ、ラン。われわれは比呂、ないし許宇と、浩の一字を取って多くの場合彼女をそう呼んだ）遠く思い出しても垣間見た一瞬の桃色の夭たる夢のように美しい人、比呂はむしろ老人を嘲るように窓際に刹那みやり、そしてその背後から黄の正面にソファに身を投げた我々を見て、すこしだけ笑んだ。葉の翳りにしかも色を隠しもしない白い夏の椿にも似て。

私と久村がその名を號して白雪革命集団に参加したとき…それは外に対して閉鎖的だが内に於ては自由な所謂秘密結社のようなものだった。すでに会員は百人近くに膨れていて、彼等はそれぞれに議論に興じた。彼等にとっては何より議論こそが必要だった。なぜならやるべき事は既に見えて居乍ら、その方法とたどりつく結果はまるで見えて居なかったから。やるべき事、即ち国家という統治形態そのものも超克。まるで乙女の夢じみた名前の由来についていえば、それは単に王黄の個人的な感傷に基づく。其よみひと未詳ノ歌曰

梅花咲落過奴然爲蟹白雪庭爾零重管

宇米能波奈

沙伎智利須岐奴

志迦須賀邇

斯良由伎丹波爾

布利志伎利都都

革命集団に入会するのは到って簡単だった。会員の誰かが王に紹介し、かつ王自身の気に入ればそれでよかった。思うにその知性の度合いと性格的な良否は問われなかった。おそらくは黄にその基準など無かったに違いない、彼はいつか行った、…知ってる？——なに？

蜥蜴には蜥蜴の眼、…ね？ あなたにはあなたの眼、…でしょう？

——眼？

鷺には鷺の、虎には虎の、…ね？

——それで？

どの眼が正しいって、誰が言った？

そうささやく黄にとって、彼の選別の基準は彼にとって美しく見えるかどうかだったかに違いない。おそらくは同性愛者からいつかのなにかの契機に川をわたってパイになったらしい王にとって、彼に美しい男以外の男に囲まれるのは不愉快以外のなにものでも無かったのだろう。尤も彼の美の基準はときには私たちの多くの予測した基準をおどろくほどに超えた。それについてはまたいずれ。

ともあれ我々は話し合い、議論し合いながら具体的な方法をもたず、方法の無い故にその結果を見ない儘に時間をすごし、臆て王黄その人はその身を土に隠してしまった。しかすがに白雪は溶けるでもなくて比呂の、…その浩然の周辺に、彼女がなにを仕掛けるともなく維持され、保持されるどころか次第しだいに膨張した。浩然は王からは何も譲り受けなかった。その新規会員の選別権さえ彼女は譲られず、それどころか誰に譲られるともなく、自然会員本人の選別によって行われた。故、いつか選別は慎重に判断すべき倫理の第一義にさえなりおおせた。

王黄を愉しませはしても無益だった我々の議論は、時を経てそれなりの方法論を手に

入れにそうになっている。その視察を兼ねて古への舊友たちにもういちど逢おうとしているのです。本当は、それが次の帰国のもっとも大きな理由。

そして、おそらく私は例の美しい夢の少女にももう一度会いたがっているのでしょう、コウ、ヒロ、ハオ・ラン、浩然、彼女に。我々のうちだれもがその名字...ファミリーネームを知らない儘だった、——そしてそんなもの、おそらくは彼女の永い長い永遠に近い固有の時間の中ですでに忘れられてしまったに違いない浩然。晝の光に見た夢の人。こんな思い出がある。

コウはひとりで一番町の千鳥ヶ淵を見おろす古い昔の高級マンションの最上階に住んでゐた（おそらくは黄 が買い与えたのでしょう、王は損害を嫌う人だった。彼にとって与えることは獲得することに他ならなかった。譬え比呂の身がいかなろうとも、それはいずれにせよ彼の資産の一つだったにはちがいないから）。そのマンションに、私がまだ白雪に入会して日も浅かった十九歳だったかの比に、しのび込んだことがあった。

何をもとめて？

私にはわからない。その時には顯だったに違いない。でも、いま、その顯らかだった輝きは消えて仕舞った。すくなくとも私の眼には捕えられないのだった。まるで飼い犬がまよいさ迷う彷徨の果てにでも終には栖み家に帰りつこうとするかにも、わたしはその夜明けの前の比に歩いた。その一番町の街路を。

すでに人気はなく、未だにも人気はない日昇の光の東に空間を裂き始める寸前にわたしはマンションのロビーを入った。二十四時間常駐だったはずの管理人たちはフロントには居なかった。あるいは通りがかりに私が喰い千切ってしまったか？ 冬だったに違いない。

エレベーターの中に入った時に、いまさらに館内の暖房に肌が一気に上気している事実気付いた。思った、...たしかにそうなる以外にすべはない、なぜなら雪が舞っていたから、と。

吾袖爾 零鶴雪毛 流去而 妹之手本 伊行觸粳

和我蕪傳爾

布利都流由伎母

那我禮沙利弓

伊母賀多毛斗邇

伊由伎布禮奴迦

ベルを鳴らすことを思い附く前に、わたしは思わずドアノブをまわした。そのとき、開錠の爲に結局は彼女を起こさなければならないのだと思った時にわたしの掌は知っていた、すでにドアが開かれていたことを。わたしは玄関の中の暗がりに身をすべられせて、そして物音を聞いた。

なにも聞こえなかった。

彼女は休んでいたに違いなかった。

以前に安原という男と、王につれられて此処に来たことがあった。だからその時の記憶の儘に進んだ突き当りの居間に入った。ひたすらに廣い空間の（...何畳あったのだろう？ 一般的なファミリーマンションの2 LDK 一つ分くらい？）向こうに空は未だに明けない儘のあざやかな暗がりをさらしていた。いつもの常に、カーテンは閉められては

いなかった。わたしは左の眼のはしにかすかにそれ、青暗い鮮明な統一の破綻が萌しているの気付いた。それから目を逸らそうとしたかのように、わたしはすでに身を翻していた。

比呂の寝室のドアを開けた。

彼女の残した体臭がわたしの眼をくらませた。

わたしは赤裸々に、彼女に愚弄され、容赦のない軽蔑とともに誘惑されたのを感じた。

ベッドに誰の影もなかった。比呂はそこにいなかった。

彼女は逃げて仕舞ったに違いなかった。

わたしは彼女に逃げられたに違いなかった。

だから、わたしのその認識はふと気づいた瞬間にはわたしをあからさまな悔恨と喪失で満たして仕舞ってた。わたしは彼女の残したあまりにも綺羅らかな香の充満の中に、彼女に見捨てられひとりその不在の内に取り残されて仕舞ったのだった。

喪失の想いが舌に味覚だに染ませ胎内にせりあがって終にいたたまれずに振り返ったそこ、開かれたドアの傍らの彼女は立っていた。

やわらかな部屋着の儘、寝起きで、そして壁に身を靠れ。

比呂はささやく。

——どうしたの？

私は思わずに、笑みに顔を崩した。

聞く。

——いきなり...

その聲、やや高めの、そしてすこし硬い音色のソプラノ。

——ぼくに気付かなかった？...どうしたの？...まだ、夜じゃない？...なにか、あった？

——どこにいたの？

——ここにいたよ。

——うそ。

——お前が、ドア開けた、その音聞こえた...気がした。聞こえなかったはずだけどね、

——そう？

——たぶん、

——じゃ、なんで

——お前が呼んだ気がした。耳元で。...眼が覚めて、...で、

——いつ？

——外に出たら、廊下に、...お前、つかつか歩いてくるから。あれ？ っ。そうおもったら

——うそ...

——ぼくのそば通り過ぎて、部屋に入ってた...なに？

ようやくに比呂は笑った。

——どうしたの？

其の時にわたしは今更に自分が許字に応えるべき理由を欠片だに持っていないことに気付いた。

許字の眼差しが其の時に微動だにせず、けれどもやさしい気配のままに私を見ていて、

そして一瞬雪崩れたようにゆららいだ。

——來なよ。

比呂は云った。

——こっち、來て。

許宇に誘われるままにわたしは寢室のバスルームに入り、彼女に言われるまま衣服を脱ぐ。わたしのさらした素肌に比呂が表情を変えもしないのにかすかに驚き、軽く賛美し、そして失望した。

わたしは自分が美しいことは知っていた。多くの女が、わたしの素肌を見ればどんな眼差しをするのかさえすでに。一樣の家畜じみた媚びと羞恥のそれ。

わたしは聲もなく許宇を見る。

聞く。

——穢い...

そして浩然は息でだけ笑った。

——洗ったげるよ。

足元に膝間付いて彼女の流すシャワーの温水に身を曝した。

——どこでどうやったらそうなる？

比呂。

——腕なんか...なに、した？

時にその漏れた笑い聲。

——びしょびしょ。...誰にも見とがめられなかったのが奇蹟。

——波乎。

わたしが呼んだ彼女の名前に比呂は一瞬沈黙し

——なに？

——波乎は怖くないの？

——なにが？

わたしが須臾の沈黙を口に咬んだのが、波乎蘭をわらわせる。

かすかにだけ。

いつくしみ、なにも、ことごとくに赦す様に。

——比呂は俺が怖くないの？

——綺四麻沙が？

見上げたわたしの眼差しは、あるいは、許宇にとって媚びて乞う犬の子じみた色を曝していたのかも知れなかった。

——まさか？

——なんで？

——必要ない。

——なんで？...と、怖がらなくていいよ、...と。許宇はささやく。「安心して。ぼく、噛みつきやないよ。...こわがらなくていい。大丈夫...」

わたしは臆て目を閉じて、その聲を耳に聞いていた。

私は彼女に言われるままにその午前、彼女の洗った服が乾く迄その寝台の中にひとりで眠ったのだった。

○香香美あて圓位文書2

(并餽から阿輪迦王に。メール、2019年9月04日)

友人に。

非常に謎めいた風景を、あなたは私に見せたのでした。

思うに、それはあなたが仕掛けた謎ではなかった。

おそらく、自然他人にはそうなるしかない類のものなのでしょう。

確信するのは、あなたが何も、何かを隠したつもりなど何もないのだろうという事実だけです。

故、敢えて何かを問う愚をは犯さずに放置しておきましょう。

しばらくは。

とまれ雪のしたに花があるなら雪解けに色は眼に沁みる以外に術をもたない。

ところで、あなたにとっては実は本当は興味が無いのかもしれないある事件について觸れて置きましょう。

久村教授（...とあえてそう頑なに呼びます。私は。わたしにとって彼は教授。だれよりも知的な人物ですから）の調査しておいで眉村一家についての件ですが、例の眞夜羽、彼、最近奇行を顯わし始めたとのこと。

即ち、その母上深雪様曰く（...これは彼女が昨日午後寺に相談に参られて愚僧の耳に入れてくださったことなのですが）毎夜ぬけだして彷徨い歩く、と。

聞くに久村氏の帰京されて後の明け方に起り始めたことのようにですが、朝起きられてご子息を起こしに行ったところ（...その日は彼の少年の小学校の二学期の始まりの日でしたからね）寝室にいない、と。

和哉氏と俱なって家の周囲を捜し歩いてもうどうにもその痕跡だにもなし、と。

案じた和哉氏、近所の加賀穀氏という方（名の訓は多計琉）にお声がけてさらにその奥様にもお助けいただき探しに捜しこれはどうももっと下に降りてるか木の影にでも隠れておるかではないかと。

かの住宅、低い小山の中腹にありますので。

小山とはいえ山は山、山が山なら当然傾斜し自然崖成すところもありということで、男ふたりその木の間に突っ込んで捜し女ふたり（その折りには加賀のおば様も連れて、ということでしたでしょうか）下の海岸沿いにまで出てしばし、歩き探していたところに、その島の岸邊、海鳥の既に飛び交う下に胡坐をかいて、こう、ぼうっと、何をするともなく沙の上を見ている眞夜羽くんがおった、ということ。

お母さま、それは今まで心配心配でいても立ってもおられぬ次第でしたから駆け寄って、あんた何してるのと。

抱き上げようとすれば眞夜羽省みて自然に、邪氣も無く自分の悪さした自覚も何もなくて...あれ？ お母さん、いたの？ と云う。

深雪さん、いろいろ罵られたんじゃない？ それでも眞夜羽なにを云うのやなにもわからんとはばかり臆て曰く、蟹、いるよ。

蟹、ね？ 蟹、沙の上いっぱいいるよ、と。

愚僧ここで深雪さんに問うて曰く、いたの？

深雪さん答えて曰く、...なにが？

蟹はいたの？

みてませんよ、...いたんじゃない？

そんなような次第で、女三人連れて帰って、山の搜索のおふたりは携帯で呼び戻してね、それはそれで事なきを得たと。

一日だけの奇矯な振る舞いかとも思ったもののそれが毎朝の日課になって仕舞った、と。つぎのは山上の無人の祠で鳥の観察、また今朝は人の家の影で犬と一緒に寐ておったこともあったとか。

深雪さん心配でいかがしたものかと。

愚僧なんの妙計思いつくでもなし、思い余ってお母様の顔色伺いながら近くの祇樹古藤記念園勤務の山羽香奈枝というかたのいらっしゃるのを今不意に思い出したに装うてその名を出して、云うに一度、相談してみられる？

案の定深雪さん怯えた顔に不快な顔、曰く、精神病院の人じゃないんかな？

愚僧、でも、我々、知識もなにもなくてにああでもないこうでもない謂っているより、さすがにそこは専門家よ。聞いたら聞いたでなんでもないんじゃない？ 対処法だったら、そりゃ、経験がもの云いますよ。

でしょう？

深雪さんいぶかりけらく、あんなところに入れられたら、出てこれないでしょう。

愚僧、それは僻んだ眼よ。

深雪さん、惑いけらく、あんな、變なひとばあおられるところに行けと？

これ等、非常に差別的。よろしくはない。ただし感う母の心の發するもの、故、同情こそ身にも心に染ちうことで、愚僧云うに一回相談したらいい...連絡先知ってる？ 連絡して、一回、家にきてもらえばいい。あそこは人道的な慈善施設で、そも、ご存じでしょう？ 奇蹟の花の咲く處よ。だから御佛の御眼のおそらく往き届いたところであって、それだからあそこにかかれて心配ないでしょうけれども、それでもそこに入園されておられる方ら、ね、その方らの振る舞いがいま、敏感で繊細な眞夜羽くんになんか影響あたえても可哀想だから、そう云って家に行かせますよ。彼女に連絡して。

それでいい？

母上いまだ腑に落ちない儘に、じゃ、眉村に相談して...

愚僧、そうね。早い方がいい。時に、眉村さん、お元気？ 氣に病んでられるんじゃない？

母上、それはそうなんじゃけれども...

かくて、今さっき和哉さんから連絡いただいて、どうかお願いします、と。

故、古藤園に連絡して山羽さんをお願いしたらじゃ今晚いかがということで。折り返しに和哉氏、ええですよ。是非におねがいするということで。

是、久村さんにも連絡しようとおもってメール開いた矢先、南国の友人のメールの届いておったに気付いた次第。

また、なにかしら事が在ったら連絡をいれます。

ところで先に奇蹟の花云々という言葉、おそらく目に付かれたでしょうが、なにも断りなく素通りしたのは若干、話が長くなる故に。

是、久村氏には話して聞かせたののですが、祇樹古藤記念園、地元の名士古藤孝文氏の好意によってもたらされた介護園なのですが、そこにインド・サーラの雙樹がござい

ます。

インド・サーラの借り樹の日本の夏牡丹と違って、気候の影響にめったに咲かないはずのインドのサーラの雙樹、この島に縁でインドはウッタル・プラデーシュ Uttar Pradesh 州に寄贈された思い出すに 80 年代の暮れつ方かつぎの始めつ方、いまだ苗木のようやくに地に根をおちつかせた頃、人のこどもの背にも満たないいきなり若やぐ葉の間いっばいの白い花を咲かせた是奇蹟の樹、恩寵の花ということで当時の地方紙にもとりあげられたくらい。

今に至りふと気付けば人の背などはるかに見下ろし、大樹の大空に伸びた枝の先に止まった眼の先には遙か古里なる天竺だに見晴るかさすと思う枝ぶり、それから一度としてたやすことなく年中に咲く白い花蔭、いまま地を這う虫の小さきにだに落とし倦まぬ始末。

いずれにせよついでにの半日にでも臈て島に來られたおりには愚僧俱なりて友を案内しようものかと老いのひとり勝手の愉しみにまつ此のごろ、遠き友にも幸多かれかし

○圓位あて清雅文書 3

(阿輪迦王から并餽に。メール、2019 年 9 月 05 日)

思いの外、早くに日本へ歸れるかもしれません。所詮日本人にとって単なる帰省にすぎないもの、なにをぐずぐずしているのかといぶかられているでしょう。ところが私の今回の帰国には同行者が二人いて、そのベトナム人のビザ所得に時間がかかっているのです。ですが、久村氏に相談したところ、久村氏更にその友人に相談し、彼の息のかかった日本語学校の誘致というかたちでビザを取るとか取らないとか。

通常よりははやくビザを所得できそうであるとの報告、久村から受けました。

また、いつか連絡していたニュースの件... おぼえていらっしゃいますか？ あれですが、そっちもおそらく予定早まって、早くて今週中に師の眼に触れるかもしれません。もっとも、是はすでに私の興味をうしないつつある件に過ぎないのですが。

ともかくに、その同行者の来日の本等の理由、あなたにも伝えておくべきとも想われます。

話は今年の初頭にさかのぼります。もはや正確に何月何日という記憶も無くしたその一月の終わり... ということは旧暦の大晦日ちかく、そちらにとっては新年騒ぎもわすれた頃、こちらの年末まっさかり、そんな頃でしたでしょうか。

あるベトナム人の友人にいつか紹介された親しく可愛らしい友人にお願い事をされたのがきっかけでした。

その名をレ・ヴァン・タオと謂いますが、彼女日本語堪能な日本語教師で、それまで私の暇つぶしに散々付き合ってくれた方だったのです。

タオは言いました。妹がいるのだ、と。臈てラン、... Lan、... 即ち漢字表記すれば蘭、故にわたしに蘭とよばれることになる少女のことですが、その姁曰く失語症である、と。言葉を失った切っ掛けについてタオはなにも云いませんでした。また私も聞きませんでした。話したくない事は離されなくてもいいことだと、わたしはそう思っているからです。

いずれにせよ蘭は今いる南の舊都サイゴンからダナン市に返って来る、タオは日中仕事

で忙しい、故、預かってくれないか、と。齡十三歳で幼く、ひとりんいしておくのは不安である、ただ、詞が話せないだけで逢ってそれ以外には聡明ささえかんじさせるいい子ですから、と。

わたしはタオのはなす詞の周囲に、彼女の語られなかった身寄りのなさを匂い取ってしまったのでした... 事実、そう思えるでしょう？ 故に心はもはや同情以外感じられませんでした。私はすぐさまに応えた、いいよ、と。いつでも連れておいで。

そうしたらタオが見せたただただ素直な笑い声に、わたしは自分の心さえ救われた気がした。そんな一日がありました。

それから旧正月、こちらではテトと呼びますが、その長い休みを無聊にすごし、やがて二月の終わり、日本なら春の甦る比とおもういつかの朝、タオが Line を鳴らしました。

——明日、来るんです。

わたしはすっかり忘れていて、とっさに要領をえなかったものだから、

——すみません... ああ... 妹のこと、覚えてますか？

思い出したわたしは彼女に笑って詫び、じゃ、待ってるよ、と。

タオは云う、お願いします。

わたしは言う、なんでもないよ、と。かくて翌日の朝タオがホテルに連れて来た蘭は、一目すぐにわたしを軽く驚嘆させたのでした。姉がむしろ人懐っこく可愛く清楚なたたずまいの方だったのにいつの間にか殉じて、わたしの思う蘭も白い肌の清らかで繊細で孤独好き、そんな愛された記憶の無い可哀想な子犬のような少女を思っていたので。

孤独好きという以外に私の知る蘭に似たところはなくて、褐色の肌を瘡せた、そのくせに小柄とは言えない精悍さを讃えた骨太の、背の低い少女が雄猫じみた不審の眼にわたしを捉え乍ら目の前に現れたからです。

私はベトナム語が今もって話せませんから、タオはわたしに彼女得意の日本語もて話し掛けます。わたしはそれにそれに勿論日本語に応えます。そのながれにタオは帰り際、——ちゃんと挨拶して！... もう。

と、日本語で蘭にしかりつけたのでした。

無言で刺す様にも私を見ていた蘭は、その瞬間、姉を返りてすぐさまに軽くわたしに会釈したのでした。

——日本語、わかるの？

私はタオに聞きます。

——なんで？

とタオ。

——今、日本語で話したでしょ？

——此の子、日本語なんて知らない。勉強したこと無いもん。日本語、難しいし、と。そう云ってタオは自分の能力をそれとなく無意識のままにも誇ってみせたのでした。

蘭はなんとなく、その場を讀んで察したということなのでしょう。

こうしてわたしと褐色の少女との、毎日半日だけの共同生活が始まったのでした。

その頃、毎日なにをしていたのだったろう？

とりとめもない日常の、なにが起こるともなくなにか起って、なにも起らなかったにもひとしく唯の日常として忘れられていく、そんな日々に日の光がさしている間、蘭はずっ

と私の傍らにいたのでした。友人と会う時、あるいは女性のひとりの友人とのひととき、乃至ただひとりで時間を持て余す時も。

そう言えば、最初の比はダナン市に来るのがはじめてだという彼女に、その観光地や近隣のホイアン、ミーソン遺跡（チャンパ、というヒンドゥー教種族ののこした寺院の跡地です）などにもバイクで連れて行ったものでした。尤も、取りつく島もなく心を閉ざした彼女から何かしらの反応を（たとえ退屈でも哄笑でも不満でもなんでも）引き出すことは出来ませんでした。

そうこうするうち、私と私のもっとも親しい友人、グイン・ティ・コアという人物との間で小旅行の話が持ち上がりました。彼曰く、ダナンには飽きたろう？ と。

わたしは言います、いや、飽きること無い美しさが此の街にある、と。

コアは笑う。——嘘、つかないで。

わたしは彼にだけはいささかの嘘さえつけないのです。わたしはその時に気付きました。慥かに私は倦んでさえいた、と。此の平和で、人懐っこい善良な人たちの生活を営む、外国人観光客たちの不遜さであふれたこの海辺の町に。

わたしは認めるしかなかった。

コアはささやいた。わたしの耳元に唇を寄せ、そして、連れ出してあげる、と。

こんな退屈な町から。

ここはあなたには相応しくないから。

ここで、あなたに羞じを忍んで告白しなければならないでしょう。コアについてです。この二十七歳の癖のある髪を肩まで伸ばしたベトナム人らしくもない青年は——ここで男たちはみんな短く刈りあげます。わたしの恋人だったのです。

私は本来、同性愛者だったのです。尤も、女性も抱きました。その意味ではバイ・セクシャルというべきですが、思うにバイというセクシュアリティは本来存在しないのです。だれもが異性愛者か同性愛者か、それだけ。トランス・ジェンダーにしたところで、実際肉体と精神との不一致というだけであって、実際には異性愛者にすぎません。

ちがいますか？

彼等と違ってバイという人種は越境したもの、川を（或は意思を以て、或はなりゆきで）渡って仕舞った人間の事を言います。わたしは、結果的に河を渡って仕舞っただけにすぎません、私の周りには常にわたしに焦がれた女たちの眼がありました。十三歳の時に、柳沼瞳という名の年上の女が（...といって、今会えば、老いさらばえたわたしの眼には十九歳の伊呂波も知りかけの未成熟な少女に過ぎないでしょう）無理やり奪い、川を渡らせたのでした（わたしの記憶に腐りかけにも思えた熟れすぎた肉の豊満な記憶をのみ植え付けて）。

コアはここで知り会い、外人向けのクラブでひとめ、お互いの本性を匂い、そして同時に既に戀に墜ちていたのを気付いたのでした。コアは日本に5年滞在して、こちらガイドのエージェントを遣っている男です。顧客はもちろん日本の観光客ないしアテンド。彼ほど日本語の堪能な男は見たことがありません。N1 資格所得済みの高給取り教師タオ先生さえ彼に教授されたよいくらいです。

コアは言いました。嘗てフランス領だったころ彼等の開発した避暑地が南部の山の上にある、名をダラットという。そこに一週間程度行ってみないかと。その雲の上にある高

原には花が咲き乱れるのだ、と。

わたしには惹かれるものがありました。なぜ？

雲の上の空中都市ということに？

そこに咲く花のまだ見ない色に？

正直に言えば、筋肉をうすく息づかせた彼の褐色の肌の匂いを独占することに、だっただけに違いありません。

ともあれ、蘭の問題が残ります。

その夕方に迎えに来たタオに謂ってみたのです。タオは一瞬思いあぐねた顔をし（…正確には裏切られ失望した、というべきだったでしょう）、しかし、すぐにじゃ、他に預かってくれる人、さがすね。

零れ落とす様にも故意に笑いました。

わたしはひとり心を痛めました。

しかにもかくにも、私は彼女たちを自分の、行ってしまえば肉の欲望に（それがいかに心と心、精神と精神の素手にふれあう親しみあいだったのが實のところの真実だったにしても）捨ててしまうのです。

むしろ彼女より悩む一瞬のあと、不意にタオは言いました、…でも、じゃ、綺夜宇さん（というのが、彼女の私に対する呼び方なのです。伎與麻沙の清の字から伎與、ないし伎與宇、それがなまって時に伎夜宇、と）いっしょに連れって行ってくれたら、いい。

云って、そして彼女はその分のお金、わたしが払いますから、と。

金銭に問題はありません。まさか。私にはかつての数年の「新進アーティスト」（…批評家たち曰く行方をくらまし「失踪」するまでの）蓄えと、ホスト時代のそれ、それをもとでの許字の手に運用される不動産収入で、金銭的な不自由は在りませんでした。

案じられたのはおそらくは旅慣れない筈の蘭の心のうちだったのです。

——心配ないよ

…ね？

——だって、此の子、もう大きいし「それに、…」

…知ってる？

——顔…「綺夜宇さん」といってね？

…綺夜宇さんといるとき

——Lan、…Lan、…ね？「幸せそうな顔する」

…知ってた？

——わたしには見せない、顔、するよ。

…もう慣れた、ね？

と。タオはさまざまに私を安心させたのです。なにより、タオの私を信頼しきった顔の色がわたしのまなざしに、心にだに沁み込んだのはじじつです。或る愛おしいあたたかさを以て。

「此の子、ホーチミン市とダナン以外行った事ないので、つれて行ってやってください」
タオは言いました。

私は彼女に自分の我が侭を謝るしかありませんでした。こうして、三人でその空中都市への旅行が決まったのです。

時は六月、降る雨が飛沫乍らに紫陽花の色に散り...というのは日本の事。こちらでは長い真夏のそのピークの一時季に他なりません。コア運営のエージェント会社の運転手の転がすマイクロバスが私たち三人だけの旅行の足となりました。車もなにも、コアの会社に用意させたのです。

ダナンから途中ニャチャン市に一日だけより、そしてダラットを冠る山脈の山道を登るのですが、山肌をぐるぐる回るその道に標高があがるしだいしだいに風景が一變していきます。中国の昔山水にある岩肌、もっとも近いのは日本の雪舟がおもうに先行絵画のデフォルメのはてに辿り着いたに違いない幾何学的な武骨な線が、それがそのまま剥けた岩肌に曝されます。樹木はもはや高山のそれ以外にはみられなくなり、空の低きに散れる雲のなかにその霧れる粒の雨なす周囲を超えて仕舞えば、頭の上にさらに上空の雲をのみ見せた空の上が開けます。それに至る前に、廃墟じみた荘厳を見せていたひたすらに高い樹木の孤独の色が此処に至って痕跡さえ無く消え失せ、かわりに、見たことも無い光の色が四方に散乱するのです。

自分の肌の上、すぐかたわらにバスのシートのかすかな青い毛羽立ちにさえも、です。

高山の光、それが我我を包んだのでした。

その驚嘆を顯わすに言葉は無効です。

またその光を顯わすにはむしろ愚劣に外なりません。

まるでなにもかも、そのふれるものからすぐさまに色彩そのものを奪い、褪せさせたと同時に、なによりも濃いそれら自身の本性の色の本性を暴き立てた、いわば、褪せた鮮やかさともいふべき見たこともない色が、ひたすらな静寂として充溢するのです。そのときに、わたしはかつてそれなりに愛して他人事のように忘れたセザンヌ、...あの松と林檎と水浴の画家を思い出したのでした。

正確に言えば、セザンヌの絵をはっきりと、初めてこの時に見たと謂っていい。

おそらくは後の二十世紀前衛派諸子の源泉となった絵画理論の宝庫として扱われるその宝石羣は、じつはそんなものに雲の下に穢れた強すぎる下界の光においてのみ思考する人らの勘違いに過ぎない。

セザンヌに理論はない。彼の絵は単に写真とその失敗に過ぎない。

セザンヌに究極の、そして作家を象徴する到達点としての一枚（——レオナルドのモナ・リザ、ミケランジェロのダビデ、ゴッホのひまわり、ゴーガンの D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?）それが存在しなかったの何故か？

どれもが単に習作じみて、一向に仕上がった本当の作品らしく見える者が存在しないのは何故か？

その答えはその時に、目の前にあった。

彼はすでに知っていた、それらの光、高山の無垢なひかりは、けっして絵筆に斬り取られ得るものなどではないことを。彼の笑筆自身は既にして失敗であり、それでも彼の眼に、そのひかりはにもかかわらず取られられねばいられないものとしてあったのだ、ということ。

故、彼は習作しか残せないない事をは知りつつ、それでも習作の群れを軽蔑しながら本当に描かれるべき一枚の絵の爲にのみ描いたので、と。

わたしはこの時に、自分がとりかかえるべき絵を、その主題を知ったのでした。

またたくまに無垢の、そして不可能性の光の中に一週間を過ごし、そして地上に降りたとき、その荒れ狂う武骨で、下品で、貧相で、凶悪で、粗暴で、知性の欠片なく、むごたらしくも穢れた色彩に目を覆ったのでした。

わたしは日々を前以上に顕らかに倦みながら過ごしました。

もはや色彩としての魅力無くした穢いタオはいつものように平日毎朝ホテルに來、そして蘭を預けました。

同じくにもはや色彩としての魅力無くした穢い友人たち、その中には愛しいコアさえ含まれて、彼等はわたしの倦んだ目の爛れに油をそそぎ、いよいよ倦怠をだけ盛らせたのでした。

七月に入って、ふと思いなおしました。山の上で思ったように、わたしは実際に苦闘するべきだろう、と。

その光の、不可能の、あり得ない奇蹟の、カンバスの上の不意の定着を求めて。

わたしはカンバスを買い込み、送らせ、ホテルにもう一部屋借りたアトリエ用室内の壁をそれで塞いだのでした。

描かれるべき水浴、その続き。

その爲にさて何をし、せめて何をスケッチするという具体的なプランも無い儘倦怠と退廃を貪るうち、その日、蘭を連れて散歩に出た海辺、日の暮れ行く風景の中で

Elle est retrouvée.

Quoi? — L'Éternité.

C'est la mer allée

Avec le soleil.

日没前のダナンの海に沈む直前に

また見えた

煌めく海に

何? —— 永遠

あわい、鮮明な逆光の

海と失せた、それ

影。黒い

太陽...

蘭の形態に気付く。わたしは蘭に、その水浴を書くだろう、と。

それはむしろ暴力的な案に想われた。わたしには。蘭はたしかに整った顔はしていた。だが、私にとって何を引きつけるということも無かった。無口な... いや、詞の有無以前の、仕草を含めたその意味で無口な彼女に憐れみは感じて、その色のいかなる色、かたちの如何なるかたちに関しても、彼女は私の思う風景に相応しくも無かった。

むしろそれゆえに?

わたしはその日没の一瞬に、具体性を持ち始めた作品計画の奴隷に成り下がって仕舞ったのでした。

タオに一言相談したところ、予想通りにタオは応えた、... モデル?

——いいですよ。

綺麗に書いてあげて、...「ね?」と。

彼女は素直に笑う。私は前に一度彼女の肖像を描いた。...全身の、そして架空の花を周囲にまき散らした彼女の望んだままの繪。...聞き取りの成果では無くて、描かれる目の、ひとり霑ませた色がそれを私に見せたのだった、わたしはこんな風景の中に、私自身を見ようとした、と。

だから、その印象の儘に言ったのだろう、須臾の後、我に返った一瞬に妹への軽い嫉妬を滲ませながら。

私は絵画に取り掛かった。

最初に取り掛かったのは下塗りでした。下塗りは私にとって、笛師にとっての笛のようなものなのです。

カンバスに何重にもブラウン地をつくり、挙句黒く塗りつぶす。そうして姿をさらした光を嫌う不細工な黒、おうとつの無い黒の上に一面の白を数度。更にブラン地を重ねて再び黒、そして白を何度か。

それで出来上がった白にふたたびブラウン被膜をかぶせる。

それだけで一か月つぶれたものの、是は乾燥した夏の大気のお陰で思ったよりも数倍以上の早さでした。

その間には蘭に手取足取りとらせたポーズでのスケッチ...これはいくつもの意味で倒錯した試みでした。まず、わたしはポーズをなど描こうという気はなかった。あるひとつのポーズをとった、その限界を維持するささやかな、持続的な、やわらかい、あるかなきなきかの、それでもやはり鮮明な苦痛の中で（だれだってじっとしているのは不愉快でしょう？ それも、例えばななめに腰をくねらせて左腕を水平やや上向きをいじして伸ばし右手は背中の方にやわらかく引いてなおかつ脇に畳みかけた一瞬を、しかもゆびをわずかにそれとなく開いたままに停止している、と？）見せる光の推移の中での色と形のうつろい、...を、更に、目に見えているものの（をむしろ愚弄しさえしながら）その向こうにあるべき形と色を思い描きながら、あえて単色濃淡だけのグラデーションに描く、と。

終わるたびに、実際蘭の肌はかすかに汗ばんでいた物でした。

カンバスが仕上がった時に、わたしはいよいよ私の水浴に取り掛かり始めたのでした。一か月、頭の中には無数の水浴が現れては消え、そして実際の取った絵筆は、白い絵具に染まった瞬間にも、自分がこれから何を描くのか知りはしなかったのです。

わたしがカンバスに向かったその八月の始め...ないし、七月の最後の日？

私は耳に聲を聞いたのでした。

——描ける？

それは低い、フラットなアルト。

私はその聲を言葉として認識していた。

だから、それはまさに言葉だったのだった。

私にとっても。

慥しむ以前に、わたしは振り向いたのです。

そこ、すぐ背後に、壁にもたれて蘭がいました。

無口な眼でわたしを見つめながら。

...錯覚、いや、幻聴？

わたしはわたしを憐れみました。いまこうしていてさえ過去の狂気に苛まれる...

ふたたびキャンバスに向かおうとしたときに

——ほんとは、知ってるでしょ？

はっきりと、その、顯らかな日本語。

——自分が描くものの、そのかたちさえまだ見えてない...

蘭。

かたむけた眼差しの中で、慥かに話しかけているのは蘭の唇でした。

——蘭？

まるで、なにかがその唇にだけ憑依したかにも、わたしには見えた。

——なに？

蘭は云った。

そして、顔の全体で終に微笑んだのでした。

——話せるの？

——話せるよ。

蘭はささやく。

私の傍らをすべりぬけ、臆てキャンバスの前に立ってその薄いブラウンに、すれすれの鼻に油の匂いを嗅いでみせながら。

——人の言葉くらい...鳥の言葉だってはなせるも...かえるの詞、...鼠、猫の?...綺夜
宇は？

——わたし？

——無理。知ってる。忘れちゃったから。もう、あなたの言葉以外、忘れたから。

——なんで...

と私が一瞬云い淀んだ時に、

——なんで？

問い返す悪戯げな蘭のまなざしに、抑々その下続くべき詞などさいしょから持つてはいなかったことに気付くのでした。

——なに？

蘭は鼻に笑い

——なんで、話さなかったの？

——わたし？

——嘘ついてた？

——わたしが？

——だって、...みんなをだましてた？

ようやくにささやくわたしに蘭は一度、静かな言葉の無い眼差しを送り、そしてかすかに笑った息を唇に漏らしかけた一瞬に、

——そう。

と、彼女はそう言ったのでした。

——だましてた。...何でって？

悪意こめて、みんな、たぶらかそうって？

残念。ノー...ちがいます。って...ね？

だってさ。
——だって？
——みんな、俺のこと、謂うから。
頭おかしいよって。
大丈夫？...って。
かわいそうに...
かわいそうに...
此の子ったら、此の子ったら...夢と現実も区別つかないんだね...て。
——なに？...それ、...なんで？
——だって、俺が云うじゃん、俺前世覚えてるよって。
したら、さ。
...わかる？
人間の頭、かたいから。それにまだ、子供じゃん？...六才だったっけ、...かな？
から、...さ。
みんな言う、なに言ってんの？...頭おかしいの？
最終的にさ、どうなると思う？
——なに？
——俺、謂い張ると。
時々マジ切れさるからね。...笑う。
なんだそれって。なに、キレてんのって、...
——その日本語、...
——わかる？ 前、日本にいたから。
日野市の方。東京。...の、はずれ。
というか、多摩ってさ、それ、多摩は多摩じゃん。
あれ、東京じゃなくない？
と、云って蘭は笑った。
私は不意に呆然と、ひとり醒めた儘に意識を亡くして仕舞っていたに違いなかった。話しかけつづけた蘭の言葉を耳にさえ入れずにただ息を潜め、目を凝らしてその唇の開閉を見詰めるのだった。...と、
「ね。」
耳元にその音声がいきなり最強音で聞こえた気がした時に——聞いている？
眼の前で、首を纔かにだけ傾けた蘭は笑った。
——俺の話、聞いている？
——慥かに、君は、あなたは、今、話してる。
——だね。
——日本語。
——だね。
——おそらくネイティブ...わからない。本気で勉強して、しかも外国語学習の天才でてもあれば
——いや、それほどでも。

——そのくらい話せるのかもしれない、けど

——莫迦そうって？

——あたは、

——失礼だね。

——ね？

——なに？

——あなた、誰なの？

私は云った。蘭は飽きかけたようにもキャンバスから身を引き離し、そしてそのまま後退して、後ろに一つだけ残されていたベッドに（すべて撤去するようにホテルに言ったのだが、収容場所がないと残されたのだ）倒れ込んだ。

——蘭。

——いまはね、...その前、...自分でいったろ、君、生まれ変わり、

——ともや、...

——ともや？

——鱸也。...ふじがわ

——藤川？

——わらうよ。

——なに？

——不死。死なないって描いて、不死。それに川...で、不死川。...不死川鱸也

蘭は聲を立てて笑う。そして投げつけるような聲に言うのでした。

——そんな、めずらしくないよ。珍しいけど。奈良の方に、結構いる。

——不死の川？

——...に、鱸ひく也、と。笑うでしょ？ そのわりにすぐ死んだ。

——すぐ？

——十六。思えばあつという間。親不孝だね。

——なんで？

——悪かったから。俺。日野の多摩川添いの土手ずっとあるいた突端にさ。あんの。

空地、みたいな。

倉庫跡地。そこに、お姉ちゃん呼び出して、...實の、じゃないよ。おれ、一人っ子だったから。

で、やっちゃった。

——やった？

——知り合いの、...同級生の、...可愛がって奴の（...て、これ、いたぶってた的な意味での可愛がりよ？）姉ちゃん。

たいしてかわいくないの。高校生。

...やすいじゃん。そんなブスの。生まれたときから値崩れ状態じゃん？

から、...さ。ねえちゃん呼び出せよって。したら、ほんと来て。で。

——なに？

——まわしちゃった。

云って笑う蘭に、...鱸也に？ 邪気はない。

もっとも、そうしたもののかもしれない。人が本当に倫理を踏み越える時、そこには悪意など何もなく、驚くほどかろやかな跳躍を見せるのかもしれない...

——みんなで。

——でも、おまえ...

——俺？ 当時中三。

——じゃなくて、死んだって。あれ、いつ？

——さきばしんなよおっさん。... 莫迦？

から、さ。... やるじゃん。そのまますておくじゃん。それだけじゃつまんなくない？

泣き寝入りじゃね？

それ、かわいそくね？

やじゃん。

かわいそなん、やっぱさ... やじゃん？ かわいそいから。

から、さ。

むしろ服？ 引きちぎって。ボロンぼろ。持ち逃げして。

で、途中捨てた。したら、そいつ、明け方？... 早朝。朝早く。でも、やったの三時くらいよ？

日曜の午後。なんかすっげータイムラグあって。そのまますっぱだかでさ、路あるいてさ。

駅前とおってさ。... あれ、よく人に聲掛けられなかったね。

——たぶん...

——なに？

——頭の中、ショートしたんだよ。見た人も。

何事って？ おどろく以前。あれ？ って。

ようやく頭の中で驚きだけでも芽生えたときには、すでにお互いに歩き過ぎてる...

——すげ。あたまよくね？ つかさ、興味ないんだけどね。おれ。実は。ごめん。お前無意味。

で、ぼこんぼこんの顔のまま... 殴ったの。姉ちゃん。わざと。顔面。折れたね、鼻。たぶん。だって、そっちのうがこれ見よがしじゃん... てか、あいつ、氷川、... 弟ね？ 奴も止めるか通報すべきよね？ そのまま放たらかしだぜ。知らん顔

——お前が怖かったからだろ？

——関係なくね？ 肉親じゃん？ 心いたくないの？

——お前は？

——もっと関係なくね？ で、あいつ警察署行った。

——じゃ、お前、

——で、やつ、いったらしい。泣きもしないで。... ま、涙も枯れちゃうよね。この情報、親情報ね。マジかよ？ で、行った、すみません、病院つれてってください... て。やば。泣ける。

——じゃ、お前、捉まったろ？

——全然。以外にノープロBLEM。そのあとやられたけどな。いや、まじ糞だあの女。なんか警察には謂ったのよ。あの屎。転びました。その一点張り。なわけねえだろ滓。どう

やって糞どこでころんでそんなざまになるのこのちん湊の糞って、女にはねえよな。それ。笑う。まじ。

——無罪放免？

——野放し Ok、女入院二週間みたいな。

で、十六になって、高校行かんくてさ。ぶらついて。したら、...てかそれもう半年後な。やってから。こっち、わすれてんじゃん。ところをさ、日野の橋んとこ、通りすがり後ろから来てさ。なに？ お前、だれ？ みたいな？ そういう余地なくおれ突き落とされて...と。いうかね、あいつに抱きつかれて一緒にドボン。恨んでた？ やつ。しかも一緒に死んでんの、おれ。糞。まじ糞わらう。

——死んだ？

——そ。ど頭つぶれて。

——いい気味じゃん。

——うるせ糞。でもま、オッケーそれわからんじゃない。やっぱ、そだよね。

——でも、地獄に墜ちなかった？ どうせそれだけじゃないんだろ？ 犯罪。

——残念。てか、地獄って...でも一瞬だぜ、死んだの...

——黄泉の世界？

——て、いうもん？ 光がめっちゃくちゃあった。一瞬。

——雲の上？

——知るか。どっか。てか、ここ自体？ わかんね。一瞬、光いっぱい。でもさ、そいつらも俺と一緒に。すぐ落ちるの。

——下に？

——知らね。是、ものの譬えよ。莫迦？ こっちにしゅんって。腹んなか。で、終わり。普通、それで記憶ぶっ飛んじゃん？ でも、量こなすときたまバグるんよ。俺みたく。で、バグった。で、このありさま。てか、知ってる？

——何？

——実は、いるの。

——何が？

——神さま。

——神？

——まじ。見なかったけど。死んだ一瞬、思い出した。神さまいるのよ。

——よく処罰されなかったな、お前。

——できねえよ。そいつ俺以上にただの糞だもん。

——糞？

——湊。頭狂ってんの。てか、そもそも、此の世界...ぜんぶの、この世界な、そもそも量こなした大量生産の中の阿保なバグだからね。

——バグ？

——から、神もきちがい、お前もきちがい、から、生き物なんて存在してんの。地球だけね...て、ここ、マザー・ジ・アース地球號よな？ 金星かどっか？ おれ、間違った？

——お前の頭の中がまちがってんだろ？

——その返しいい。莫迦なりにいいじゃんてか、ほかにも三つくらいいるのよ。

——宇宙人？

——ノーノーノーやっぱ莫迦は馬鹿。命？ みたいな、なんか、違うの。動くよ。

——なにそれ。

——でも関係ねえよ。俺らにや。ともかくさ、神さまが...あれ、頭のおかしな胎児なの。

——胎児？

——所詮バグだから。軽く奇形っちゃった状態？ 胎児未満。こう...ちっこいのが胎児になって、でっかくなってこんちわするじゃん。あれの、マイナス成長すんの。

から、胎児未満。

めっちゃ糞じじいの...何億歳？ むしろ兆行ってた？...の、マイナス胎児。

——なんだそれ。

——知らね？

——何を？

——ラブクラフト。

——作家？

——ゲームの元ネタ。あれのラスボスでいんじゃない。笛吹いてる気ちがいのあかちゃん。あれがラスボス・ゴッドみたいな。あれ。若干違うけどな。いや、すげえ違けどな。ま、じゃっかん正しかったね、そいつ。やっぱ、奴、名前すげえじゃん。

——だれ？

——ラブにクラフトじゃん？ しかも H に P だろ？ エッチなど変態のピー音かつラブのクラフト状態じゃん？ どんだけクラッシャーなん？ 頭ん中どクラッシャー状態？ 笑う。

——で、...

——ピーひゃらゴッド？ むしろひゃらピーゴッド？ お前逢いたい人？ てか暇なん？

——なにしに來たの？

——俺？

——なにしに、

——ひで。おめえがモデルにさしたんじゃない？

——違う。此の世界に、もう一度。

——知らねえよ莫迦。話し読めないねマジ。生きてる？ 死んでた？

私は聲を立てて笑ったのでした。

あとは、...耳を掩うばかりの蘭の...艦也、...彼の？ 愚にもつかない戯れ言の洪水にすぎません。

意外に思われるかもしれませんが、私の筆はむしろの戯言の中進み始めたんでした。抑々なぜ興味も無かった彼、...彼女をモチーフにしたのか、今更に私には思い知ったのでした。或は、かれこそが私に、そして私の絵には相応しかったのでした。

そう、わたしは確信して居ました。

私の繪は本来膨大な時間を必要とします。例えば青の面が必要な時、まず私は薄く塗った白の線分に黄色を重ねる。そしてその上にいとど青を。そして上にもう一度白、更に黄色、更に赤、其の上に青を二度三度、白を塗り重ねながら塗る。此処で謂う青、黄、赤はカテゴリー名称で、それぞれに膨大な実態を持っていることはご存じでしょう？ そうやってそれぞれに違う青を並べていく、そうして目が青、と。そうとらえる多様なグラ

デーションの面を広げる...故に向こうが透けそうな薄塗に見える画面は、その實夥しい皮膜を重ねて成立することになります。

気候に助けられました。灼熱の日差しに、瞬く間に乾く色彩がわたしに速度を与えました。

毎日タオは迎えに来、そして出来上がって行く絵画を見、見る前に既にほめたたえ、そして彼女は蘭を連れて帰る。其の時には蘭は失語障害を患う無口な蘭を綺麗に装のでした。まるでわたしの見た妄想だったかのように。

ある時の会話。

——ね、知ってる？

いつものようにベッドに寝そべって彼女は云った。

——人間がさ、一番やっちまった的な顔するの、何時だと思う？

——いつ？

背後を振り返らずにわたしは云った。

絵を描く手が忙しかったからだ。

——知りたい？

——すっげえ、興味あるね。

——うそ。わかるぜそういうの。やば。傷ついた俺。

——いつだよ。放せよ。

——知りたいんだ？

——話したいんだろ？

——正解。何故なら暇だから。小指折った時。

——小指？

——リンチ。みたいな？ ボコる時、そのあとでさ。その前でも。手、踏むじゃん。で、ケツに、やつの頭敷くじゃん。で、小指反対にさ、ぽきんって。折ってやんの。ケツの下で、なんか遠いメする。いてえ...とかすっげえみじめっちくほざいたり？ しちゃったりしながら？ やべえ...やっちまった俺、まじ、まべえ的な。笑うよ。それ見ると。まじ。

——お前友達いなかったろ？

——なんで？

——いるわけないじゃん。御前みたいな淳。

——いたね。

——まじ？

——結構大量。

——下僕じゃなくて？

——そうともいう、けど、やつら結構俺に親身だったね。実際。

——そうなの？

——まじ。俺、まじ心赦した。

——勘違いだろ？

——なにそれ。

——お前の勘違いよ。

——ちがうから馬鹿？ おっさんまじ勘弁して。そういう知ったかぶりマジむかつくけど

別にどうでもよくもある。

——へらず口がどしゃ降るね。へらず口集中豪雨みたいな？

——なにそれ糞じじい。俺が死にかけた時

——死に懸け？

——そ。

——刺されたとか？

——反対。自分で刺そうとしたの。

——自分で？

——そ。

——いつ？

——秀マロ...って、これ本名じゃないよ。時代違うから莫迦。さすがにそれ現代じゃない。マロをさ、喰らわしてさ。実際刺してやんなきゃわかんねえだろって思ったの。やつ、いきなりナイフだしてくるからさ。

——お前にやられて？

——いつも持ってたのは知ってた。むかつくからやってやんじゃん。やつキレるじゃん。したらいきなり。お前刺すからっていうからさ。だったら刺せ蛸って。そしたら奴へたれてさ。手ふるわせてんじゃん。から、取るじゃん。奴の手からさ。なもんでさ、奴さしてやろ的な純な少年の破壊衝動？

わかる？

なんか、瞬間飽きた。もう。マロいたぶんの。もっとなんかあんじゃない？ からさ、云った。俺。てか俺死ぬって。

皆さ、なにそれ状態？

から、さ。おれ首切ろうとしたの。ふんって。自分の。

したらまーダチとびかかっておれ押さえつけてさ。やべえよそれ違うから違うからって。

まじ、止めんのな。結構ウルった俺。

——死ねばよかったのに。

——俺？

——そっちのほうが世の爲じゃない？

——それ正解。おれもそう思う。でもさ、やっぱ必要だぜ？

——お前みたいな糞？

——そ、純粹マッドネス。

——迷惑だから。死んで。

——いや、

——勘違いすんな。

——必要よ。勘違いお前だからね？ 誰もが求める夢の純粹ナイーブなこの俺インセンシティブなナチュラルボーンマッドネス的な？

——お前英語いろいろ間違ってるよ。

——関係なくねよ？ いいたいことわかんじゃね？

又の日に。

——お前、親居なかったの？

——いきなりなに？
——親、居なかった？
——話折るね？ 折りまくるじゃんどうした？ 脳みそ腐った？
——俺が親ならお前見た瞬間自殺する
——脳みそ、虫飼ってる？
——お前の親にだけはなりたくないわ。
——泣いてたね。てか、殺されかけた。
——親に？
——お前日本語判ってる？ それともひょっくらチャイニーズ？
——どっちだよ？ 母親？ 父親？
——こくな糞。お母さま。
——まじだ。
——夜さ。気配で。家で寝てやってたらさ。気配で。だれや？ いきなり俺にケツ掘る
氣？ みたいな？
でさ、起きたらお母、包丁持って立ってんの。
——部屋に。
——ドアんとこ。
——お前の？
——むかつく。速攻、やつぼこった。ぼこりまくりにぼうっとしてひいひい息、ぜえぜ
え云って立ってんの。くそでしょ。から、ハン殺し。でも結構後悔したな。
——生まれて来たことに？
——その母親がね。残念な人生じゃね？ まじ。自分で生んだ餓鬼に病院送り。なんちう
失敗人生なのやつ？ 笑う。
——お前が病院は入れよ。
又の日に。
——お前、ホモ？
と、蘭は云った。
——俺？
——お前以外にお前いんの？
——そうだよ。
——見たよ。
——見たの？
——きもい。
——いつ？
——ダラット。
——あれ、な。
——あれは、吐く。なに？ あの黒いの。
——俺の男だよ。
——でもがっかりした。
——なんで？

——やってること、姉ちゃん兄ちゃんと一緒にじゃん。くそつまんね。ただのマネ事じゃない？ なにがしたいの？

——お前も掘ってほしい？

——勘弁して。もっとこう、...オリジナリティなもん、ほしくない？

——寝たふりして盗み見たくせに？

——氣、使ったんじゃない？ てか、お前ら滓な。

——ホモだから？

——そういう糞差別主義的発言やめて。ネットざわつくよ莫迦？ 笑う。俺がいた譯じゃん。俺、十四じゃん？ 餓鬼じゃん？ 女子じゃん？ しかも若干可哀想な子なんじゃないの？ 俺。しかも他人から預かってんじゃない？ お前ら人してやっていいことと悪いことの区別ない人？

——お前にいわれたくない。

——それ、謂えてる。

云って、邪氣も無く笑う蘭を私は振り返り見た。

次第に私の目の前に、私の絵は姿を現し始めるのでした。判りにくい言い方なのですが、作家は実は、自分の描くのがいかなるものか、実は描きながらほの見、ほの見していくもの...しかも、思ってもいなかった姿に驚きながら、を、繰り返してゆくのです。

わたしは自分の作品に驚嘆しつつあった。

たしかにこの絵にもあの光は、その匂いだに残っていない。けれども、違う意味で、あくまでも見たものの勘違いとして様々なイメージをもたらすには違いなかった...私の心に見てるあるべきイメージとはまた別の、まったく他人の異質なイメージが目の前に現れつつあった...

時にわたしは（あくまで他人ごととして）絵に見蕩れさえたのでした。「おっさん、生きてる？ 手、とまってるよ」そんな蘭の嘲りの聲を背後に時に聞きながらも。

ほぼ完成した比...いままでにも速筆で、それは八月の暮れ近くだったと思う。何かの話の折に蘭は不意に云ったのだった。

——おっさん、俺を連れて帰らきゃな。

——連れて？

——いや、まじ。

——どこに？

蘭は応えなかった。

ですから、振り返り見た蘭はうつむいていました。

ベッドの端に座って。

近づいて、蘭の頭を撫でたのです。

顔を上げました。

蘭が。

そこに、黒目が雙つあった。

彼は微笑み、そしてこう云ったのでした。

「日本へ行く。」

ささやくように、——歸るぜ、と。蘭は、

「海の中に…」

と。…あるじゃん？

「あんだよ、それ…」

——じゃね？

と、蘭は、…燃える城。…もえ上がる真っ赤な柱。

「あれ…」 ささやく。蘭が、「あれ、…さ」

燃える、海の中の城。

——日本に歸るぜ、あんたと。おれら…と。

「歸るぜ」

ささやく蘭の聲をだけ、私は聞いていました。…むしろ、はじめて蘭の肉声を聞いたかにも錯覚して茫然とした一瞬に、すでに耳は蘭の立てた嘲りに似た笑い声を聞いているを遠くに、理解したのです。

わかりますか？

私は今、あなたに今回の帰國のそもそものいきさつの本等を、あなたには告白したのです…

香香美清雅、あるいは一狂人

奥書

以上は黎マに依って 2020.12.02-23. に書かれたものの第二部その後半

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

多香鳥ー3

著 黎マ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
